K－746

山形市熊ノ前遺跡

－第１次調査報告書－

山形市教育委員会

山形市熊ノ前遺跡

―第１次調査報告書―

序

この熊ノ前遺跡は、昭和４８年、山形県庁舎新築工事及び主要県道須川橋～滑川線の開道工事により発見されたものです。本遺跡は馬見ケ崎扇状地の中央、標高２０４ｍを中心とした地域に広がっており、奥羽本線山形駅から東へ約４Km、千歳山の北側の水田地域に埋れていたもので、このため地下深く掘ることもなく、今回の工事により偶然に発見されたものです。

続いて、この水田の土地区画整理工事が予定されており、埋蔵文化財の保護の立場から県教育委員会、附中前土地区画整理組合と協議し、専門的に調査し、記録保存に資するよう努力したものです。埋蔵文化財を保存し、後世に伝えていくことは、今日のわれわれの使命だと思います。

昭和４９年春、県教育委員会文化課が、遺跡の範囲の確認と予備調査を実施しました。その後、本調査のため「熊ノ前遺跡発掘調査団」（団長　山形大学名誉教授　柏倉亮吉先生）が結成され、７月２６日～８月２５日までの１カ月間、現地発掘調査がおこなわれました。連日の炎天下のなか調査が続けられ、その結果、縄文時代中期（約4.０００年前）の遺跡であることがわかり、住居跡　１１、多数の土器、石器が発掘されたことは縄文時代の山形を知る上に新たな光があてられ、大きな意義をもつものです。

公私とも忙しい中を調査を担当して下さった赤塚長一郎先生、小形利彦先生、その他調査団の先生方に感謝いたします。

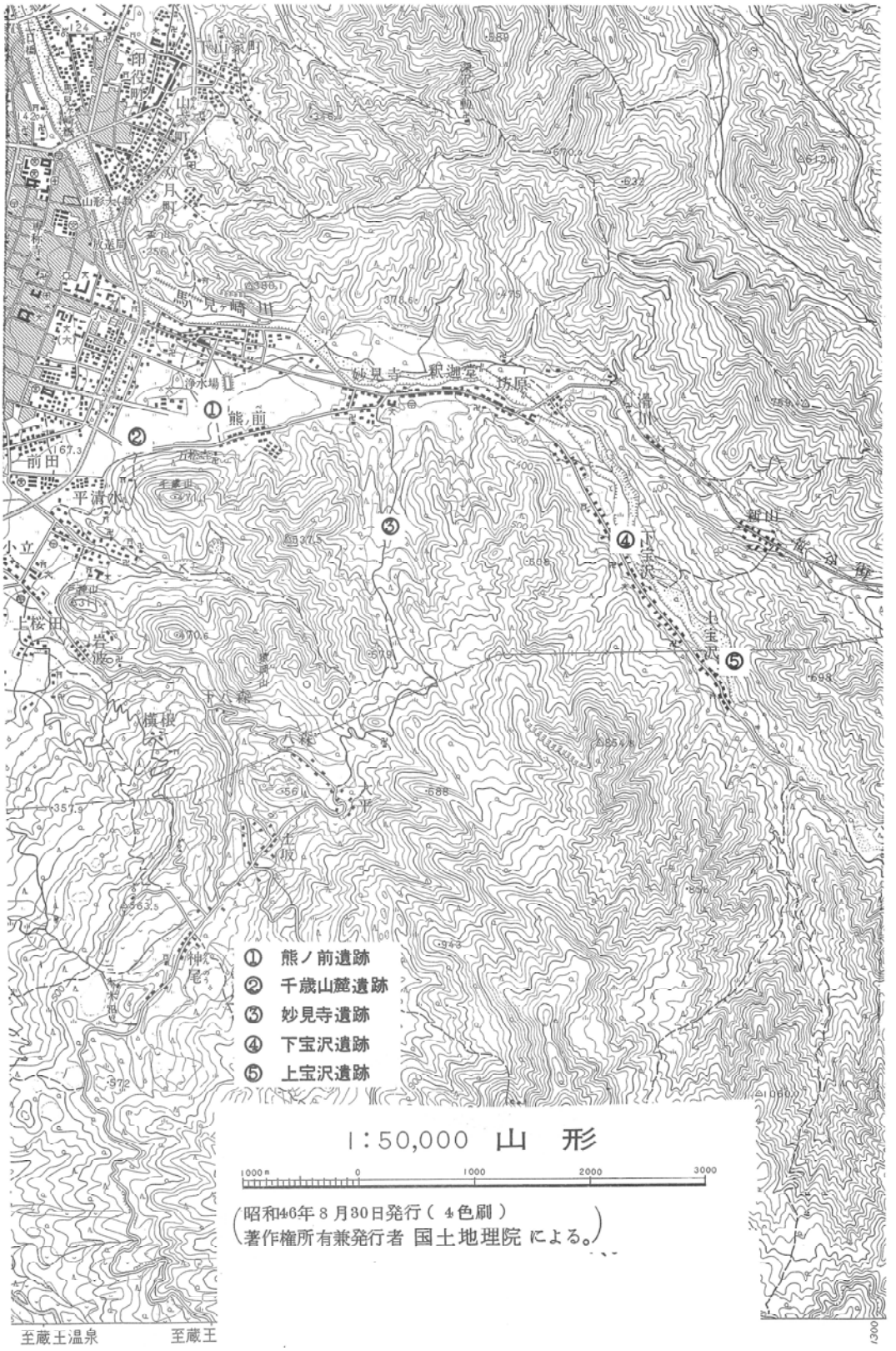
暑さのなか、積極的に発掘をして下さった熊ノ前・妙見寺部落の皆さんと日本大学山形高等学校郷土研究部の諸君ありがとうございました。

さらに、県教育委員会文化課、附中前土地区画整理組合の絶大なご援助ありがとうございました。

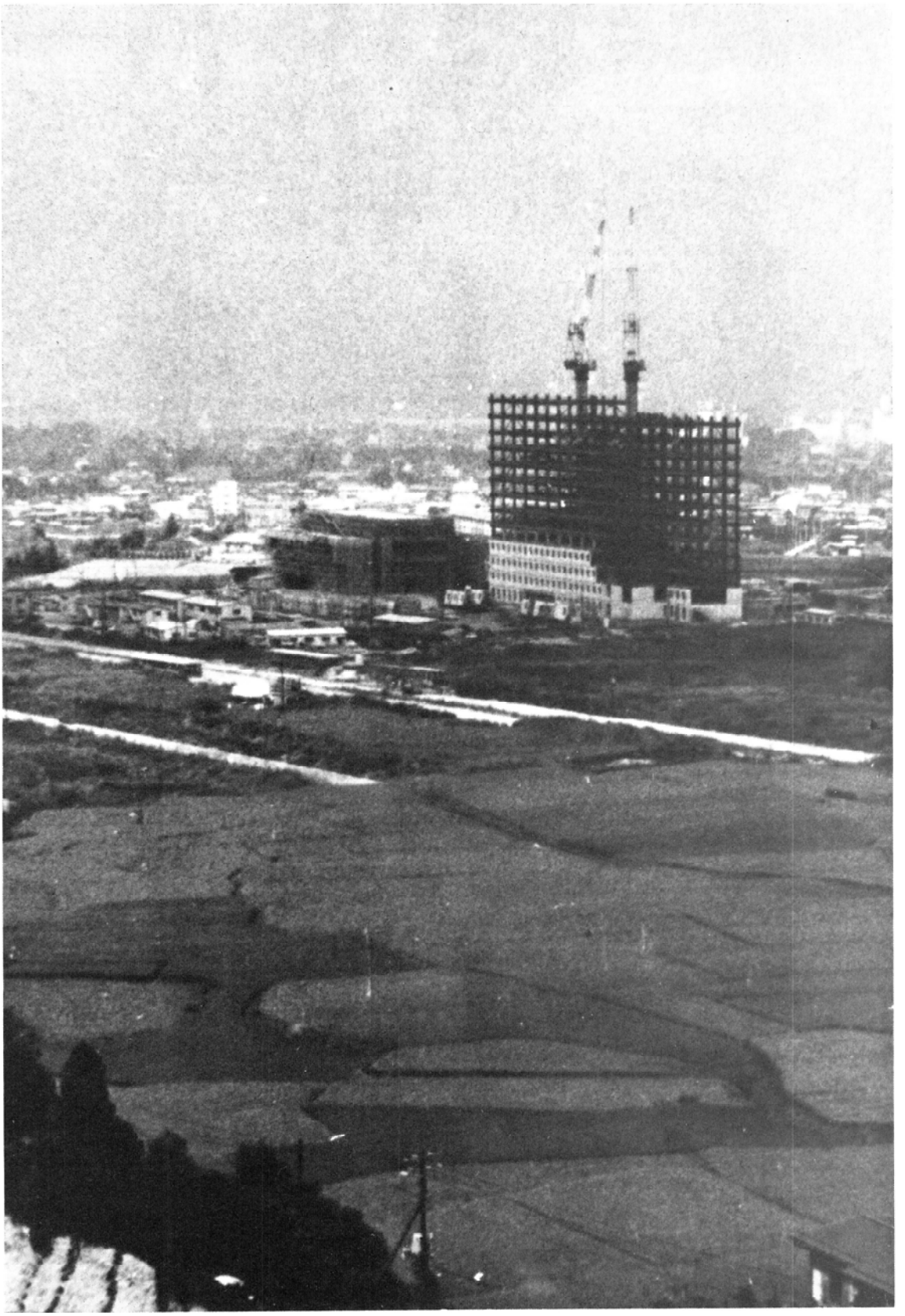
この報告書が、遺跡に対する理解を深めるとともに埋蔵文化財の保護に役立てば幸に存じます。

昭和５０年５月

山形市教育委員会
教育長　川　合　俊　一



第1図 熊ノ前遺跡の位置①と環境



第２図　南東の山から望む熊ノ前遺跡

目　　次

Ⅰ　は　じ　め　に …… 1
Ⅱ　調査にいたるまでの経過 …… 4
Ⅲ　遺跡の位置と環境 …… 6
Ⅳ　調 査 の 経 過 …… 9
Ⅴ　A地区の遺構と出土遺物 …… 15
Ⅵ　N地区の遺構と出土遺物 …… 19
Ⅶ　C地区の遺構と出土遺物 …… 43
Ⅷ　D 地 区 の 遺 物 …… 48
Ⅸ　総　　括 …… 49

挿　　図

第 1 図　熊の前遺跡の位置①と環境 …… 巻頭 1
第 2 図　東南の山から望む熊の前遺跡 …… 巻頭 2
第 3 図　遺跡付近の略図 …… 6
第 4 図　熊の前遺跡、トレンチ配置図 …… 11
第 5 図　N地区と発掘風景 …… 13
第 6 図　Aトレンチ、Aへ～Aト東西断面図 …… 17
第 7 図　Aトレンチ、イ・ロ、グリッド東西断面図 …… 17
第 8 図　第1号住居跡（Aトレンチ、イ・ロ） …… 18
第 9 図　(1)　Nイ・Nロのセクション …… 20
　　(2)　Nロ・Oロのセクション …… 20

第10図　(3)　東西第1セクション …… 20
(4)　東西第2セクション …… 20
(5)　南北セクション …… 20
第11図　N地区住居跡配置図 …… 21
第12図　第3号住居跡 …… 24
第13図　第4号住居跡 …… 26
第14図　第5号住居跡 …… 26
第15図　第6号住居跡 …… 27
第16図　第7号住居跡 …… 27
第17図　N地区第1号炉跡 …… 30
第18図　N地区第2号炉跡 …… 31
第19図　N地区出土磨製石斧実測図 …… 36
第20図　N地区出土石鏃実測図 …… 37
第21図　N地区出土石器実測図 …… 39
第22図　N地区出土石器実測図 …… 40
第23図　N地区出土石器実測図 …… 41
第24図　N地区出土石器実測図 …… 42
第25図　Cトレンチ東西セクション …… 44
第26図　Cトレンチ南北セクション …… 44
第27図　第10号住居跡（C地区） …… 47

図　　版

図版 1　A1図～A5図
図版 2　A6図～A9図

図版　3　　Ｎ１Ｎ地区全景
　　Ｎ２第３号住居跡（北西側より）
図版　4　　Ｎ３第４号住居跡（西側より）
　　Ｎ４第４号住居下の東西セクション
図版　5　　Ｎ５第５号住居跡
　　Ｎ６第６号住居跡（手前）
図版　6　　Ｎ７図～Ｎ１２図
図版　7　　Ｎ１３図～Ｎ１８図
図版　8　　Ｎ１９図～Ｎ２４図
図版　9　　Ｎ２５図～Ｎ３０図
　　県庁敷地内で発見された複式炉
図版１０　　Ｎ３１図～Ｎ３５図
図版１１　　Ｎア　土器破片の出土状況
　　Ｎイ　土器底部の出土状況
図版１２　　Ｎウ　土器破片の出土状況
　　Ｎエ　高坏状土器の出土状況
図版１３　　Ｎオ　浅鉢の出土状況
　　Ｎカ　第４号住居下からでた土器とその出土状況
図版１４　　Ｎカ　第１１号住居跡確認のきっかけとなった土器
図版１５　　Ｎキ　土偶の出土状況
　　Ｎク　不明土製品の出土状況
図版１６　　Ｎケ　不明土製品の出土状況
　　Ｎコ　不明土製品の出土状況
図版１７　　Ｎサ　土錘の出土状況
　　Ｎシ　磨製石斧の出土状況
図版１８　　Ｎス　磨製石斧の出土状況
　　Ｎセ　石鏃の出土状況
図版１９　　Ｎソ　石匙の出土状況
　　Ｎタ　スクレーパーの出土状況

図版 20　Nチ　丹ぬりの凹石の出土状況
　　Nツ　石錘の出土状況
図版 21　上　N地区第1号炉跡
　　下　N地区第2号炉跡
図版 22　C1図～C6図
図版 23　C7図～C11図
図版 24　D1図～D4図

Ⅰ はじめに

「みちのくをふたわけさまに聳え」る奥羽山脈が、山形県の東境を宮城県と区画しながら、南北に連なる。その山脈中の秀峯、蔵王・雁戸の嶺々が西になだり下るところに、山形市が、３８１・５８平方キロメートルの広袤をひろげている。

傾きくだる間に起伏する幾つかの小尾根の間には、大小の渓谷が抱かれており、それぞれ、水源と渓川をほとばしらせる。その内の比較的大きい二つが、山形市の地域を東から西に貫いて流れる。その南なるは馬見ヶ崎川であり、北なるは立谷川である。ともに流水が上流から運び来た砂礫を中流以下に堆積させて、見事な扇状地を形成している。現在の山形市の市街地は、大部分が馬見ヶ崎川の扇状地の上に載っている。

馬見ヶ崎川が山間部を外れんとするあたり、その両側を擁して、南北に対い合う丘が立つ。南なるは千歳山（４７１１ｍ）、北なるは盃山（２５６１ｍ）である。両者の相隔つること１３キロ、ここが馬見ヶ崎川渓谷の谷口であり、また、山形市街の載る扇状地のほぼ扇頂にあたる。扇頂での標高はほぼ１９５ｍ。

いま、ここに山形県新県庁舎が地上７３５５ｍの高層としてアイボリーホワイト色に聳え立ち、その下手に山形大学の附属学園（中学校・小学校・幼稚園）が立ち並んでいる。

かつての縄文人の集落、熊ノ前遺跡は新県庁の地点附近に大きくひろがっていたのである。

この扇状地の中央付近にこのような大集落が地中に埋もれていようとは、昭和４８年秋まではわれわれも考えてはいなかった。昭和３７年度の遺跡分布調査では(1)扇状地の扇端部近くに、数々の土師遺跡があることを確認したが扇央部にはなお及ばなかった。その遺跡が白日のもとに現われたのは、昭和４８年秋の偶然発見による。

昭和４８年２月、かねてから検討されていた新県庁舎の建設敷地予定地が、山形市街の東南部（松波地区）であることが県議会で公表された。その西隣接地には、すでに、山形大学附属学校群が一区画を占めて活動していることでもあり、山形市有地も隣接していることとし、これらを周る付近一帯の民有地関係者は、やがて組合を結成して土地区画整理を行うこととなり、関連して大道の建設も着手された。

この大道（滑川・須川橋線）の工事ならびに大道をくぐり抜ける地下道建設の工事が、たまたま、深く埋れる遺跡の一角にかかったのである。こうして掘り出された土器片が、土地区画整理組合から武田好吉氏を通じて山形市へ、また、萬松寺（平清水千秋師）を通じて県当局へ、それぞれ届けられ、遺跡の存在が推定されるとともに、その究明が緊急事として採りあげられなければならなくなったのである。

調査の第一歩は、翌４９年の春３月、県教育委員会文化課による予備的調査であった。付近一帯の巡回調査の結果、遺物散布地の推定される広がりは新県庁舎敷地の南東隅をかすめて、その東方から南方にかけての一帯にわたる大範囲であろうこと。遺物の時代は縄文中期の後半であろうこと等である。地籍の上では山形市大字妙見寺で字名では熊ノ前・谷地・大羽黒などにまたがる。

続いて四月、同じく文化課による試掘で、地下道付近に遺跡の存在が確認された。６月には大道の両側の歩道敷（幅１メートル）の調査があった。

こうして、本調査を如何に行なうべきかについての打合せが県・市の当局者間でなされた。その結果、諸般の事情を考慮して地下道付近の民有地が選ばれ、山形市がこれに当ることとなった。関係者の同意を得て実施計画が立てられ、いよいよ発掘に着手したのは昭和４９年７月のことである。地形的には馬見ケ崎川扇状地の中心部で標高２００メートル。地表の現況では、すでに区画整理の行なわれたところである。地籍の上では大字妙見寺字熊ノ前に属する。遺跡の呼び方は、国土地理院５万分の１のルビのように「クマノベ遺跡」とする。

編成された調査団の組織・団員は次の通りである。

熊ノ前遺跡調査団

団長　柏倉亮吉（山大名誉教授、市文化財調査員）

調　査　員

赤塚長一郎（山大附中市文化財調査員）、小形利彦（日大山形高）、相田俊雄（天童二小）、荒木利見（大井沢小）、山口和夫（山四中）、三浦ゆり子（山形）、武田やす子（尾花沢）

調査協力者

＜日大山形高＞　高橋　潤、渡辺　清、山口浩二、飯野美彦、高橋宏道、本木国昭、朝一直人、小松勝美、斎藤淳司、西村俊昭、槇　茂、渡部敏雄、渡辺伸二、伊藤健登、金山　功、土屋勝義、飯野祐司、和田千代、阿部登美子、斎藤陽子、大沼朋子、山鹿百合子、豊田恵美、佐良土久美子、伊藤礼子、小松儀子、鈴木　徹、熊谷静子、佐藤真理子、庄司　晋、村岡富佐志、大風重之

＜上山農高校＞　佐東昌敏、草刈　孝、武田伸二

＜山大附中＞　柴田乃里子、境沢雅子

＜一橋高校＞　小林利明、梶本　俊、古瀬為明

＜大学生＞　松田幸彦、茨木光裕、佐藤孝宣、長岡　明、三浦俊孝、柴田敏志（以上日本大学）　大山　隆（中央学院大）　渋谷利信（城西大）　金沢禎司（千葉商科大）

細谷宏子（東海大）　飛塚真弓（東北福祉大）　仲島　寛（山形大）

＜地　　元）　神保小助、前田善助、鈴木留吉、富塚吉太郎、黒木清三郎、小林虎之助、会田庄八、黒木　登、原田元吉、会田庄七

協力者（機関・個人）

山形市文化財保護委員会、山形市附中前土地区画整理組合、山形県教育委員会文化課、山形市消防署、横戸昭二、加藤　稔（山大）、川崎利夫（天四小）、武田好吉（市文化財保護委員）、山形　理（山大地質）、吉田三郎（山大地質）、米地文夫（山大地形）、山形市児童文化センター、山形市郷土館、野球場、日大山形高校

事　務　局

山形市教育委員会社会教育課

（順不同、敬称略）

発掘調査は７月２５日から始められ、８月２６日に終了した。実質１カ月である。その期間中、調査団を悩ましたものは、作業人員の不足と並んで河水による遺跡原形の錯乱と二旬を越えて続いた旱天の炎熱であった。盂蘭盆（うらぼん）の休日をも返上する程の厳しい発掘にもかかわらず、流水による大小礫石の重なりに加えて、炎熱のため遺跡判定の基礎となるべき土色変化は忽ち消え失せる場合があった。

この間、作業員不足を見るに忍びずとして市社会教育課の諸氏は駈けつけてスコップを振るい、また、県文化課は随時に応援を厭わなかった。更に、土地整理組合と地元の方々の暖かい協力も忘れられない。また学術的な面では地形地質に関する山形大学の山形理教授、土器内遺物の燐分検査に関する吉田三郎教授のご指導に深く謝意を表したい。

出土品は極めて多量にのぼった。これが水洗、整理に関しては全面的に日本大学山形高等学校の郷土研究部の諸君の手を煩わした。それらの事後処理のためには、山形市営野球場・児童文化センター・山形市郷土館などの施設から便宜を与えられたことを深い謝意とともに記しておきたい。

(注)　(1)　山形県遺跡地名表　　昭３８.３　　山形県教育委員会

全国遺跡地図（山形県）　　昭４１.３　　文化財保護委員会

Ⅱ　調査にいたるまでの経過

昭和４８年の春、須川～滑川線の一部、千歳山山道付近から山形大学附属中学校前までの道路が区画工事された。この工事は附中前土地区画整理工事と併行して行われた。この頃、山形市街地の南部から東部にかけて、同様の工事及び農業基盤整備工事がハイピッチで進められ、鳴瀬川遺跡（縄文中期）や松見町遺跡（縄文中期）滝山遺跡等が発見されたため、千歳山山道付近の工事の時にも表面調査を行っていた。工事はブルトーザーによるため土の掘り起しが大きくなかなか発見されないでおったところ、一中学生が雨上りの日土器鑑定のために附属中学校へもちこんだ。

土器片は渦巻文の発達した厚手のもので、縄文中期大木８ｂ式のものとわかった。大きな破片１３点ほどあったため、再度現地調査に出向いたところ、小さな土器破片数点採集することができた。しかし、土の状態からみて、遺跡の中心は開設された道路の中央になったと考えられ、その後の調査は不可能となった。

この年、いよいよ新山形県庁の工事と土地区画整理工事、それに、山形駅前から東へ直進し山形大学附属中学校前止りになっていた道路と須川～滑川線が交互し、新山形県庁の東までの工事が進んできた。ところが恐らく、６、７月頃かと思われるが区画整理及び道路工事従事者によって土器が採集され、地元の方や武田好吉氏（山形市文化財調査員）等へ渡された。武田好吉氏は赤塚長一郎（県文化財巡回調査員）へ連絡くだされ、遺物をみせてくださるとともに、出土地についてきいた範囲内で説明してくれた。

その後、現地に出向き遺物の出土状況、遺跡の位置等を確認することができた。その間すでに話が広がっていた。遺跡確認の後、山形県教育委員会文化課にも報告され、山形市教育委員会とともに突然発見の遺跡についてその保護対応策を検討していた。

当時遺跡は、熊ノ前部落寄りの土地区画整理組合で開道した道路付近と新山形県庁敷地より東の須川～滑川線道路の二か所かと考えていた。

同年秋、県文化課では早急に、遺跡の位置と範囲、包含層、時代等の確認のため須川～滑川線道路の両側の試掘を行い、遺跡は以外に広いことがわかった。また、包含層も確められ、時代も縄文中期大木８ｂ、９式頃と考えられ、以前に工事従事者が採集し、武田氏や赤塚らが判定したものと違わない同遺跡であることがわかった。

一方、山形市教育委員、山形県教育委員会文化課は、須川～滑川線道路の側溝から南の水田について、土地区画整理組合及び所有者との話しあいから工事に入る前に発掘調査を行うことにした。これが４９年春である。この決定に入るには、調査主体者になる山形市

教育委員会としても、遺跡の保存状態など広汎な検討を試みてきた。特に、須川～滑川線道路の南側の水田は包含層が浅いことや棚田状に近い地形などから、道路の北側よりも著しく保存状態が悪いこと。遺跡のかなりの部分が道路及び側溝、昔の水田工事（畦伴）などで破壊されている可能性がある等から、記録保存のため発掘調査を行うことになった。

調査に当っては、山形市教育委員会が中心となり、山形県文化課、山形市附中前土地区画整理組合及び所有者は文化財保護の精神から積極的に協力しあってくれたことは、調査団としても敬意を表したい。

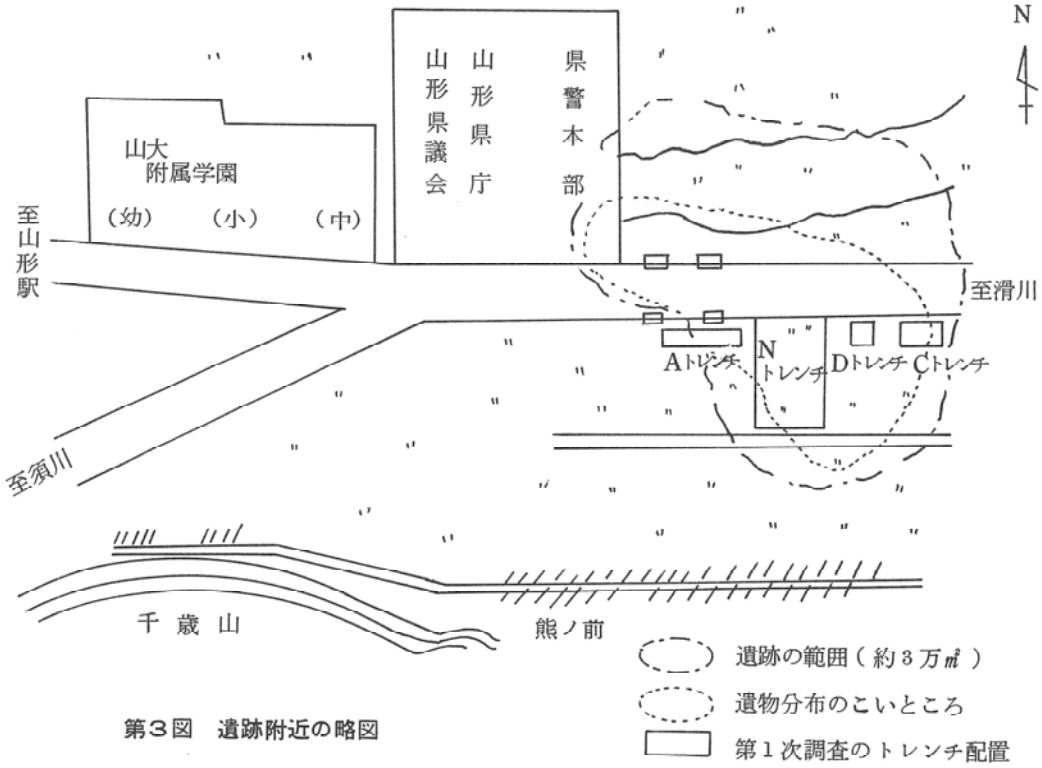
Ⅲ 遺跡の位置と環境（第1・3図参照）

山形市熊ノ前遺跡という命名については、昭和49年10月の山形市文化財調査委員会において決定された。その後、新山形県庁、山形大学附属幼、小、中学校等付近は松波町という町名に決定されたが、従来は、山形市小白川町の部分が多く、遺跡の範囲約三万平方メートルの中には妙見寺内に含むところも多かった。

千歳山の北方山麓熊ノ前部落は江戸時代には小白川村（現山形市小白川町）の枝村で、熊ノ辺などと書いた例もある。五万分の一の地形図等においてもこれまで、熊ノ前と書き「クマノベ」とよませてきた。戦後、土地の人々は「クマノマエ」とよぶようにしているが、実際には「クマノベ」という呼び方と混在している。

以上のような理由から旧小白川町内の枝村で、遺跡の多くがその町内に含み、小字名に当る村落も近くにあるところから「山形市熊ノ前」遺跡と命名されたのである。

さて、熊ノ前遺跡の位置であるが、奥羽本線山形駅から真東の方向約4キロメートルの地点にある。蔵王山麓に源を発する馬見ケ崎川の扇状地の扇央のうち、やゝ南寄りに偏した



第3図　遺跡附近の略図

水田地内にある。南には千歳山がそびえ、現地付近には標高２００メートルの等高線が南北に走っている。

遺跡からは、西方の扇端から南北に流れる須川、及び対岸の白鷹丘陵まで一望でき、山形市の市街地から西、北西一帯を望むことができる。扇状地の成因源である馬見ヶ崎川は現在、扇状地の北の盆山の山際を流れ、東西の方から北西の方向へと流れ、最上川近くで須川と合流し、最上川に注いでいる。扇央の遺跡付近では、東の妙見寺であがる前田堰や笹堰など３本の用水堰が東西に走り、従来、一帯の水田をうるおしていた。この用水堰を中心にして遺跡をみると、笹堰から前田堰周辺、つまり、扇央の位置の南半に偏している。

山形の人々には、馬見ヶ崎川といえば、明治初期まで県都山形の中央を流れ、氾濫したので、遺跡付近も流れ、河原化しないかと疑問をもたれることだろう。ところが、実際、河原化するほどの氾濫は盆山突端から西方、つまり、緑町を中心にして西流したのである。遺跡付近においては、遺跡が流失するほどの氾濫が無ったようである。後に遺構の章でもふれるが、近世以後、用水堰とされてきた自然流水の冠水に近い状態の変化はあったと思われる。この遺跡は縄文中期、数千前の遺跡だが、それ以前には、上流の山をくだくほどの、流石を起すほどの氾濫は、扇状地が完成した後にもあったことは、一部地層を調べたり、巡検の結果からも推察できる。

さて、馬見ヶ崎川扇状地内において、熊ノ前遺跡ほど広い縄文遺跡はない。熊ノ前遺跡は、遺物散布地外縁線を結ぶと約３万平方メートルに及ぶ。（第１図）それに比べ、千歳山麓遺跡（第１図②）は縄文中期大木８ａ～８ｂだが小範囲の遺跡である。上流の馬見ヶ崎川の支流妙見寺川の中程に、縄文後期の遺跡がある。（第１図③）同図④は下宝沢遺跡で縄文後期、⑤は上宝沢遺跡で縄文中期大木８ａ、８ｂ期のものである。これらが縄文時代の住居集落と考えられる遺跡である。そのほか、石器片や極く少量の土器片が出土する所として関沢や宝沢にもあるが、住居集落といえるかどうか難しい。これらいずれも、馬見ヶ崎川及びその支川からみて、高位の段丘または、比高のある段面に存在している。

弥生文化期の遺跡は、馬見ヶ崎川扇状地の湧水地帯から平地にかけて、鈴川（高原）、宮町、今塚、江俣等に存在するがすでに稲作文化をもっていた。扇状地内では、熊ノ前遺跡の南端で、難しい遺物を工事中に採集しているが断定に苦慮している。当地方における土師器文化期では、宮町が古式に属し、平地の嶋遺跡、続いて、五日町、長苗代、山形五中校地、霞城付近、盃山山麓などがあり、古墳文化や条里など古代社会へと連続的に発展している様子をうかがうことができる。

以上のように、扇状地内とその周辺で縄文文化とそれ以後にわたって概観するに、扇状地内の利用は極めて限られていることがわかる。隣接する立谷川扇状地の場合、荒谷～山

寺地区にかけて連続して広範囲に縄文中期遺跡が分布している。上山盆地、須川中流においても、連続して広範囲に分布している。これらに比べ、馬見ヶ崎川流域、扇状地内では遺跡―原始集落は点的分布の性格が強いと考えられる。その中で、熊ノ前遺跡の範囲はかなり広く、後にのべるように、住居が重なりあっていることなど集落跡の研究に好資料を提供している。

注 (1) 会田　容弘「妙見寺遺跡について」さあべい　3号

(2) 赤塚長一郎「山形市馬見ヶ崎川流域における縄文文化の研究」
羽陽文化　90号（昭46）

(3) 堀野　昭「山形県南村山郡東沢村下宝沢の縄文後期遺跡について」
歴史学研究（山形大学）　1号・2号（昭29.30）

(4) 山形県教委編「遺跡地名表」山形県教委刊　（昭和37年）

Ⅳ 調 査 の 経 過

本格的な調査は、数会の打合せの後７月３０日より開始された。そのうち主な事項を拾ってみると次のようになる。

７月３０日（火）　うすぐもり

２５日から２９日まで打合せや予備調査を行い、３０日の午後山形市教育委員会の方々と赤塚、山口、荒木、小形の各調査員がテントの設営、発掘予定地のサーベーを行なう。その後Ａトレンチ・Ｍトレンチ・Ｎトレンチを設定する。

８月２日（金）・８月３日（土）　くもり

両日とも工事による盛土の排土と表土はぎを各全日実施する。県文化課の佐藤係長が現地視察に来られる。

８月４日（日）・８月５日（月）　は　れ

Ａトレンチの各グリッドの排土を行なう。Ｎトレンチも各グリッドの表土はぎにかかる。本日より当分の間、県文化課の保角氏が調査協力に来られるとのこと。

８月６日（火）　は　れ

Ｎトレンチでは、第２層から第３層へと進み住居跡と思われる遺構が検出される。Ａトレンチでは、第２層下部に礫層が見られる。

８月７日（水）　は　れ

本日よりＭトレンチの名称を廃止してＮトレンチを中心に東側にＯトレンチ・西側にＭ・Ｌ・Ｋ・Ｊを設定しＮロ・Ｎニ・Ｎヘ・Ｎチ・Ｎヌの遺構を中心にＯチ・Ｍホ・Ｍト・Ｍリを拡張する。今日までに住居跡と思われるプランが５か所見つかる。ＡトレンチではＡイ・Ａロのプランを図面にとる。Ａニ・Ａホ・Ａヘ・Ａトでは土層図をとる準備をする

８月８日（木）　は　れ

連日天候にめぐまれているが、本日は日大山形高校郷土研究部が多数応援に来てくれる。Ｎトレンチの東側にＯからＴまでを設定する。Ａトレンチではイ・ロの図面とりを終える。午後、県文化課々長補佐浜田氏、同佐藤係長、同鈴木主事が現地視察に来られる。

８月９日（金）　は　れ

Ａトレンチの黒色土層面でのプランについて詳しい調査を行なう。ＮからＱの各トレンチでは、第２層から３層まで掘り進んだが詳しい遺構は不明である。本日は石器、土器などが多量に出土した。

８月１０日（土）　は　れ

調査員荒木利見氏に長男誕生の知らせが入る。Ａトレンチでは昨日に続き、イ・ロ・ハの詳細な調査を継続する。ＮからＴまでの各トレンチでは住居跡の検出に努力するが未だもってわからない。また今までそれと思っていたところが違うらしいという事で一同がっかりする。

８月１１日（日）　は　れ

Ａトレンチにおける詳細な調査の結果、イ・ロ・ハの部分で住居２軒分が確認された。Ｎチ・Ｑリで焼土が検出され、今後に期待される。午後山形市教育委員会、川合教育長が視察に来られる。

８月１２日（月）　は　れ

昨日検出された焼土を中心に住居プランの確認作業を終日行なう。

８月１３日（火）　うすぐもり

スケジュールを検討した結果、予定したグリッドは全部調査することになり、終日拡張作業に全力をあげる。特にＮイ・Ｎロでは川崎利夫氏の協力により住居プランの詳細な調査をする。本日より東側にＣ地点を設定し発掘にとりかかる。その結果焼土、石器などが出土する。県文化課舟山氏、市教育委員会の新関氏が現地視察に来られる。

８月１４日（水）　は　れ

お盆が近いせいか人数少なし。Ｎイを中心に見つかった住居プランを仮称３号住居跡とする。Ｃ地区では第３層より、丸石を入れた土器が出土する。

８月１５日（木）　は　れ

仮称３号住居跡の図面をとり写真を撮る。ＮからＴまでは住居プランの確認に全力をあげる。Ｃ地区では第３層まで掘り進む。

８月１６日（金）　は　れ

人員が少なく仕事が余りはかどらず。ＮからＴまでで５軒の住居プランが確認される。本日も川崎利夫氏が来られる。

８月１７日（土）　くもり

住居プランの清掃を行なう。Ｃ地区ではさらに東側に拡張を行なう。午後山形大学の山形理先生が地質調査に来られる。

８月１８日（日）　は　れ

Ｃ地区では拡張が終り遺構の精査を行なったところ、推定で２軒の住居跡があることがわかった。新たにＤ地区をＣ地区とＮ地区の中間地点に設置し早速発掘を実施したが、埋土のような感じで、特に遺物も出土しないまま礫層に達する。Ｎ地区では発掘も最後にな

第４図　熊ノ前遺跡・トレンチ配置図

第５図　Ｎ地区と発掘風景

りＮからＴまでは、住居プランを全体的に確認するため各グリッドの壁をはずす作業を終日行なう。午後県文化課の佐藤庄一氏が応援に来られる。

８月１９日（月）　は　れ

４号住居跡の全体がつかめる。Ｃ地区の調査が一応終了する。

８月２０日（火）　は　れ

調査も最終段階にかかる。山形大学の米地文夫先生が地形調査に来られる。先生のお話しでは「熊の前遺跡は馬見ケ崎川と千歳山の北側から流れ出る川にはさまれた台地の上に立地したらしい」との事。作業としては前日の継続をする。

８月２１日（水）　は　れ

全部の住居プランを確認の上、写真をとる。３号住居跡は精査の結果、相当に注意を要する住居とわかった。

８月２２日（木）　は　れ

終日図面とりを行なう。

８月２３日（金）　は　れ

正午より山形消防署のハシゴ車を使用して空中よりの写真とりを行なう。ハシゴ車のゴンドラには小形調査員が乗った。Ｃ地区、Ｄ地区、Ｎ地区、Ａ地区の発掘が一部を残して

ほぼ完了する。

８月２４日（土）　くもり

土層図や遺構図などの図面どりを行なう。盛土の下になっている３号住居跡北半分は協議の結果後日調査を行なう事に決定する。

８月２５日（日）　くもりのち雨

山形市教育委員会の方々と調査員が合同して、テントその他の撤去作業を行なう。午後３時全部終了する。遺物は日大山形高校に於て洗う事に決定する。また３号住居跡の北半分の盛土については、１１月下旬をめどに排除してもらうようにお願いをする。

１１月３０日（土）　は　れ

前日までに３号住居北半分の盛土を機械で排土してもらっておいたので午後高校生２０名の応援を得て表土はぎを行ない、夕方だいだいの配列が判明する。

１２月　１日（日）　は　れ

昨日の続きを行ない、午前中は写真とり午後は図面とりを行い夕方遅く完了する。プランを見ると敷石住居跡を思わせるが、完全でない為不明である。後日の検討課題となる。

Ⅴ A地区の遺構と出土遺物

(1) 出　土　遺　物

A地区は2ｍ×20ｍのトレンチで2ｍごとグリッドをつくり、東からAイ、Aロ～Aヌと名づけた。Aトレンチでの遺物は、硬質頁岩のわずかのチップが発見されただけで、土器片がほとんどである。次に、グリットごと代表的な土器を説明したい。なお、包含層はわかるが土器の層位的な差は認められなかった。

1. 土　　器

Aイのグリッドでは、口縁部破片、体部破片、底部破片のうち、口縁部及び口縁部の把手、体部破片が多く、底部破片はごくわずかである。

把手は16点ほどある。そのうち代表的なものは図版A1図に示してある。1・4は完全に把手状で穴または、耳状渦巻形をつくっている。2・3・5・6は口縁部の装飾に近いものである。2は隆起縁を生かし、体部には貼付文あるいは沈線文を斜縄文の上に施す類である。3は斜縄文の上に貼付文を口縁部から底部にかけて施している。5は口縁帯に隆起線状に卵形をつくり、凹面に米粒状の刺突文を付している。頭部から体部まで斜縄文が施され、隆起文が走っている類である。いずれも焼成が良く、厚さも1.2ミリメートル以上が多い。色は灰褐色から褐色、茶褐色、黒褐色などいろいろである。

体部では、斜縄文に沈線を施しているものと貼付文あるいは細い隆起線文を付しているもの、ヘラ状器具による半円状の沈線を施しているものの三種類がある。図版A2図が沈線文を描いた土器である。

図版A2図の土器は厚さ1.3センチメートル灰褐色で細い砂や雲母が少し混入している。この類の土器は7点あるが、いずれも沈線で円状を描いている。口唇は平縁である。

Aロのグリッドでは、Aイほど土器の量は多くない。口縁部は1点、渦巻文、他は体部破片だけである。複節の斜縄文の場合、沈線や隆起文がなく、単節斜縄文の場合、細い隆起文が2本平行に走る。いずれも褐色を呈し、時には砂を少し混入し、厚さは1センチメートル以上が多い。

Aハのグリッドでは口縁、体部の破片などその量も多く、整理箱二個ほどである。口縁部では隆起文が周りに付された平縁といわゆる把手状のものと二種類ある。前者は体部になると斜縄文の上に2本の細い隆起文で平行あるいは渦巻文を付すものか、あるいは深鉢形、浅鉢形などがある。

把手状口縁には図版A3図1のように手つき状のものや2図のような渦巻状突起、4の

ように内に潜むタイプなどがある。

図版Ａ４図に示した如く、口唇が平らで口縁部から体部全体が複節縄文で覆われている土器もある。黒褐色で焼成よく、１センチメートルの厚さである。

Ａホでは前記Ａイ～Ａハと同じ分類の土器のほかに、磨消縄文の類と編物押圧文の底部（網代底）がある。磨消縄文の類は、Ａヘなどでも多くでているので、図版Ａ５図を参照されたい。図版Ａ５図の底部は直径１８センチメートル、厚さ１.５センチメートルで堅い焼成である。同図左の二つの破片は茶褐色を呈しているが、底部と同一個体に近いグループのようである。

磨消縄文が最も多く採集されたのはＡヘのグリッドである。図版Ａ６図２～６がそれである。２～４は縄文帯との境がわずかに隆線状になり、５・６は沈線で区画されている。２～４とも口縁部であり、どのグリッドでもでているような把手はこの磨消縄文類の土器にはつかないようである。氷による文様の損傷がみられるが色は褐色または黒褐色で細い砂を含むものもある。厚さは１センチメートルから１.３センチメートルぐらいまでである。

７は磨消しでないが同じグリッドから伴出したものである。このグリッドでもほかに、斜縄文の類、渦巻文など他のグリッドでみられるような土器片が整理箱半分ほどの量に達している。

Ａトのグリッドでは土器量は少なく、小破片を含めて５０点ほどである。ただ、かなり動いた様子で文様の損傷も大きい。そのうち、最も多い類は、斜縄文に沈線または細い隆起線が走る土器である。口縁部には把手がつくものも少し含まれている。

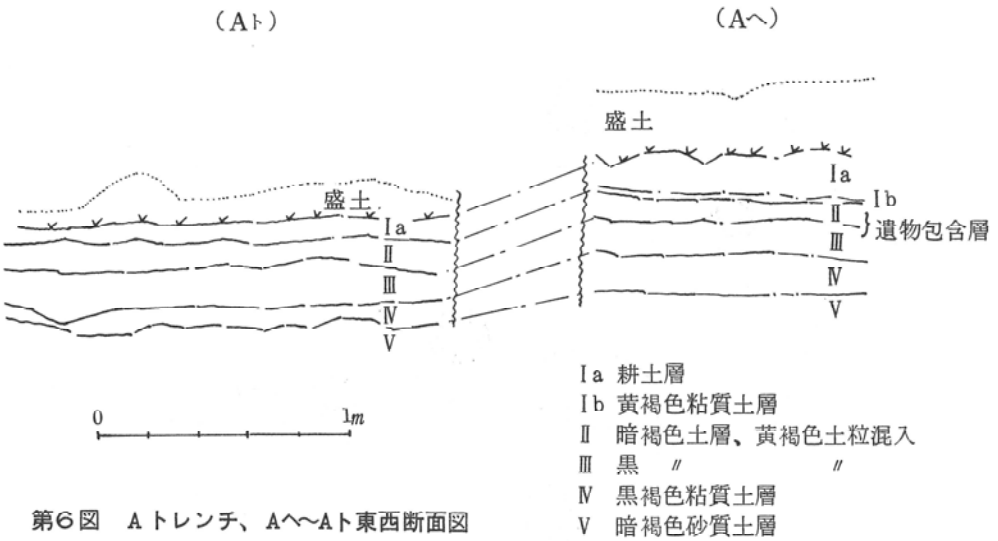
なかでも特色ある土器は図版Ａ７図に示した撚系押圧文が多い土器である。器形は深鉢か浅鉢で口唇の外側に細組の粘土を小半円山形状に貼付し、頭帯も粘土組でつくっている。口唇部の貼付文にはヘラ状器具で切り目をつけ、頭帯部には撚系を縦に押している。体部には細い斜行縄文を付している。体部の厚さ９～１０ミリメートルぐらい、灰褐色で焼成がよい。図版Ａ７図はほゞ同一個体と思われる。

⑵ 遺　　構

Ａトレンチは須川～滑川線の道路に沿ってほゞ東西に設定し、東から２メートルごと、イ～ヌまでのグリッドをつくった。１グリッド４平方メートルの広さである。所によっては、道路にするため堀り上げた大石や土のため、人手ではどうにもすることできず、主としてＡイ～Ａホの範囲内の調査となった。

そのうち第６図Ａヘ～Ａトの北壁セクションをみてもわかるように、堆積層はＩａ～Ｖ１層まで数えることができ、そのうちⅡ層～Ⅲ層が包含層のようである。また、Ａヘ、

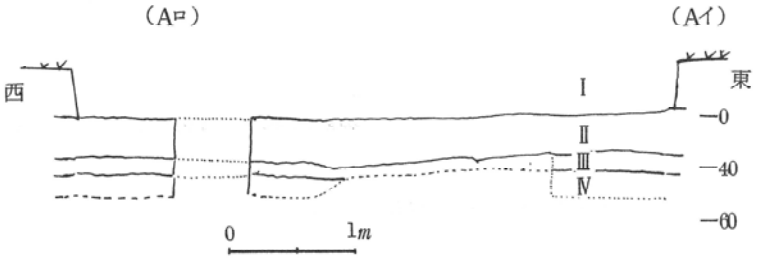
Aトの層位での関係は大差ないが、Aトは一段低くなることがわかる。これは扇状地における小段丘のような地形の複雑さを示す一つでもある。しかし、遺物包含層はⅡ～Ⅲ層付



第6図　Aトレンチ、Aヘ～Aト東西断面図

近で前記遺物の章で述べた通りである。

Aトレンチで遺構として確認できたのは、Aイ～Aロのグリッド内である。その東西のセクションはA2図の通りである。遺物はⅡ層下部からⅢ層にかけて出土する。(図版A8



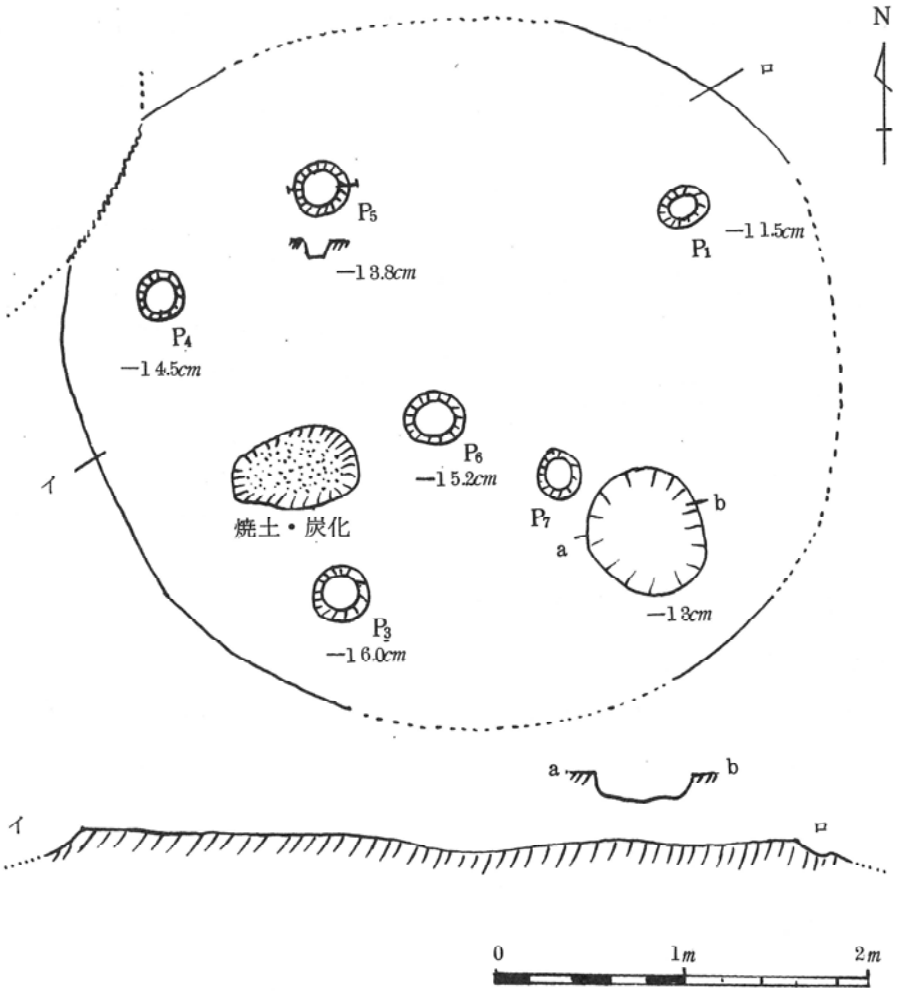
第7図　Aトレンチ、イ・ログリッド東西の断面図

図参照）しかも、小石が多く、土器破片と混在している。

第Ⅲ層の下部、小石と土器片の混在する中に炭化物を含む面がある。この面をさぐっていった結果がA3図である。

柱状ピットはP1～P6まで発見された。その数値は図面の通りであるが、そのほか焼土、炭化物の多いところや50×60センチメートルの凹地がある。

第8図に示した如く（図版A9参照）プランは直径4.2メートルの円形で床の側面は少



第８図　第１号住居跡（Ａトレンチイ・ロ）

なくとも１２３センチメートルほど低くなる。溝になるのか、竪穴式の壁があるのかどうか北側は破壊されており確認できなかった。南側は水田のため、こゝでもはっきりつかめない。いずれにしても小規模で粗末な構造である。

Ⅵ　N地区の遺構と出土遺物

N地区は、Aトレンチの面より一段高くなっている水田面に7月30日に設定された。Aトレンチより約30m東に所在し、南北39m、巾2mのNトレンチを設定したのでこの名称がおこった。このNトレンチは、東西に拡張できるように内部を2m×2mのグリッドにしきってある。その結果最終的には、約700m²を発掘し今回の調査では最も大きい面積の調査となった地点である。ここでは多数の土器破片、石器、土偶、石製品、土製品などが出土したが過去における耕作、耕地整理などによって相当深い層までのかく乱が認められ余りよい資料を得る事ができなかった。

1　N地区の土層について

熊の前遺跡は水田として長年利用されてきたため、地層には「かく乱」がめだち良好な土層とは余りいえない。調査の一端として、N地区では、N地区を南北に横切る南北トレンチを1本、N地区を東西に横切る東西トレンチを2本設定して土層の調査を実施した。特に東西2本のトレンチは4号住居跡、5号住居跡を切断するようにした。その結果は

第1層　表土（耕作土）

第2層　暗褐色土層、（黄褐色土粒混入）

第3層　黒褐色粘土質土層、（黄褐色土粒混入）

第4層　黒褐色粘土質土層

第5層　暗褐色砂質土層

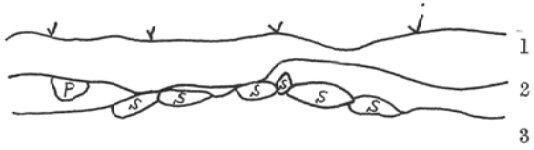
というように区別される。このうち遺物が混入しているのは、第2層と第3層で、住居跡の生活面と見られるのは、第3層から第4層にかけての部分と推定されるが特に第3層下部に於てはその傾向が著しい。

(1)　第1層～第3層について

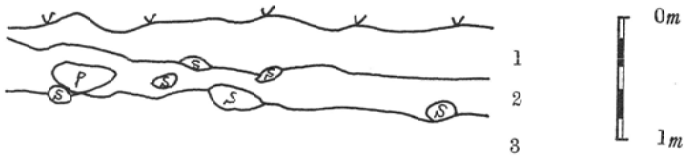
Nイ・Nロにおける境のセクション（第9図(1)）図でわかるとおり、耕作土直下の第2層は比較的うすく、第3層まではすぐである。この第2層と第3層に石器、土器破片、石などが混入しているのである。これは、Nロ、Oロにおける境の東壁セクション＜第9図(2)＞のところでも同様である。

(2)　東西第1セクション＜第10図(3)）

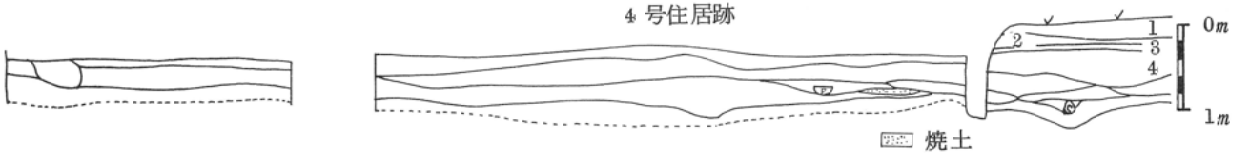
4号住居跡を切断するように設定したトレンチで巾1m、長さ約13mの規模で、4号住居東側でかく乱が見られ、また4号住居跡は第3層の中頃にある事がわかった。同住居



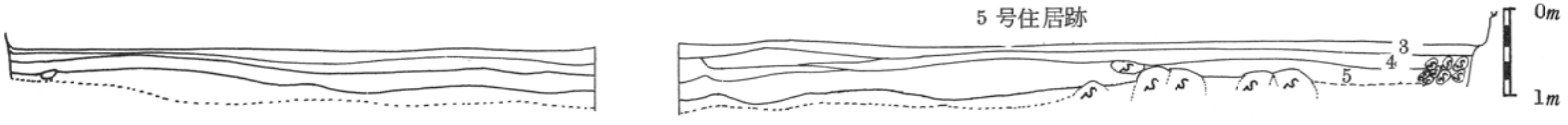
第９図(1)　Ｎイ・Ｎロのセクション



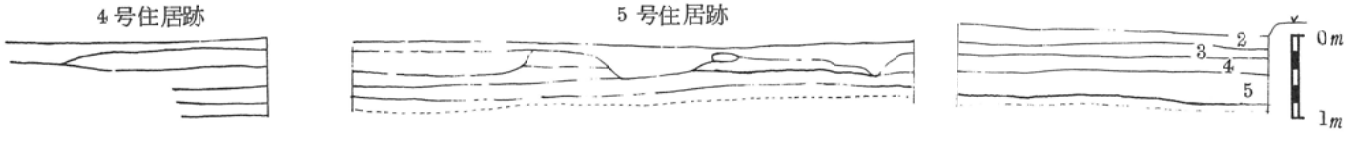
第９図(2)　Ｎロ・０ロのセクション



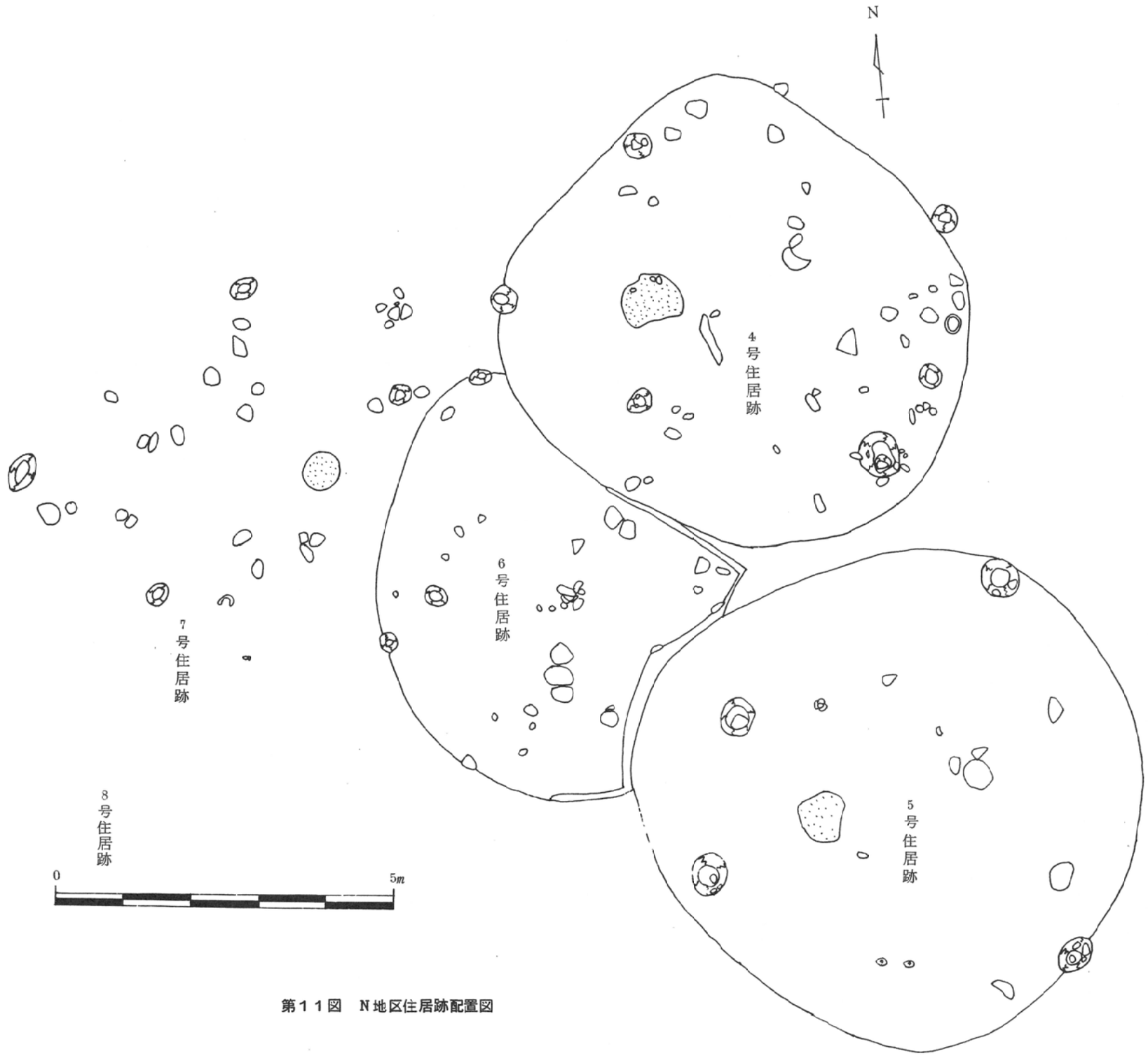
第１０図(3)　東西第１セクション



第１０図(4)　東西第２セクション



第１０図(5)　南北セクション



第１１図　Ｎ地区住居跡配置図

跡の床面より４０cm下部に於て土器底部が出土し、４号住居跡の下にも住居跡があった事が確認された。付近には、わずかであるが焼土も５０cm位であるがレンズ状に検出された。この住居跡は第５層中に包含されるものと考えられる。

(3)　東西第２セクション＜第１０図(4)）

５号住居跡を東西に切断する形で巾５０cmのセクション用トレンチを設定した。５号住居の下部において河原石が見られ第５層中頃より下部は調査できない有様だった。５号住居もやはり第３層に立地していることがわかった。

(4)　南北セクション＜第１０図(5)＞

４号住居跡より５号住居跡までN地区を南北に切断するように設定した巾１mのトレンチである。５号住居跡北において落ち込みが見られ精査してみたが理由は不明であった。土層はおおむね水平で特に変化したことなどは認められなかった。

なお、このN地区は他のA地区、C地区、D地区と異なり、下部の５層以下は湧水の為、掘られておらず、礫層までは、確認されていない。

２　住居遺構について

(1)　３号住居跡（第１２図　図版N２参照）

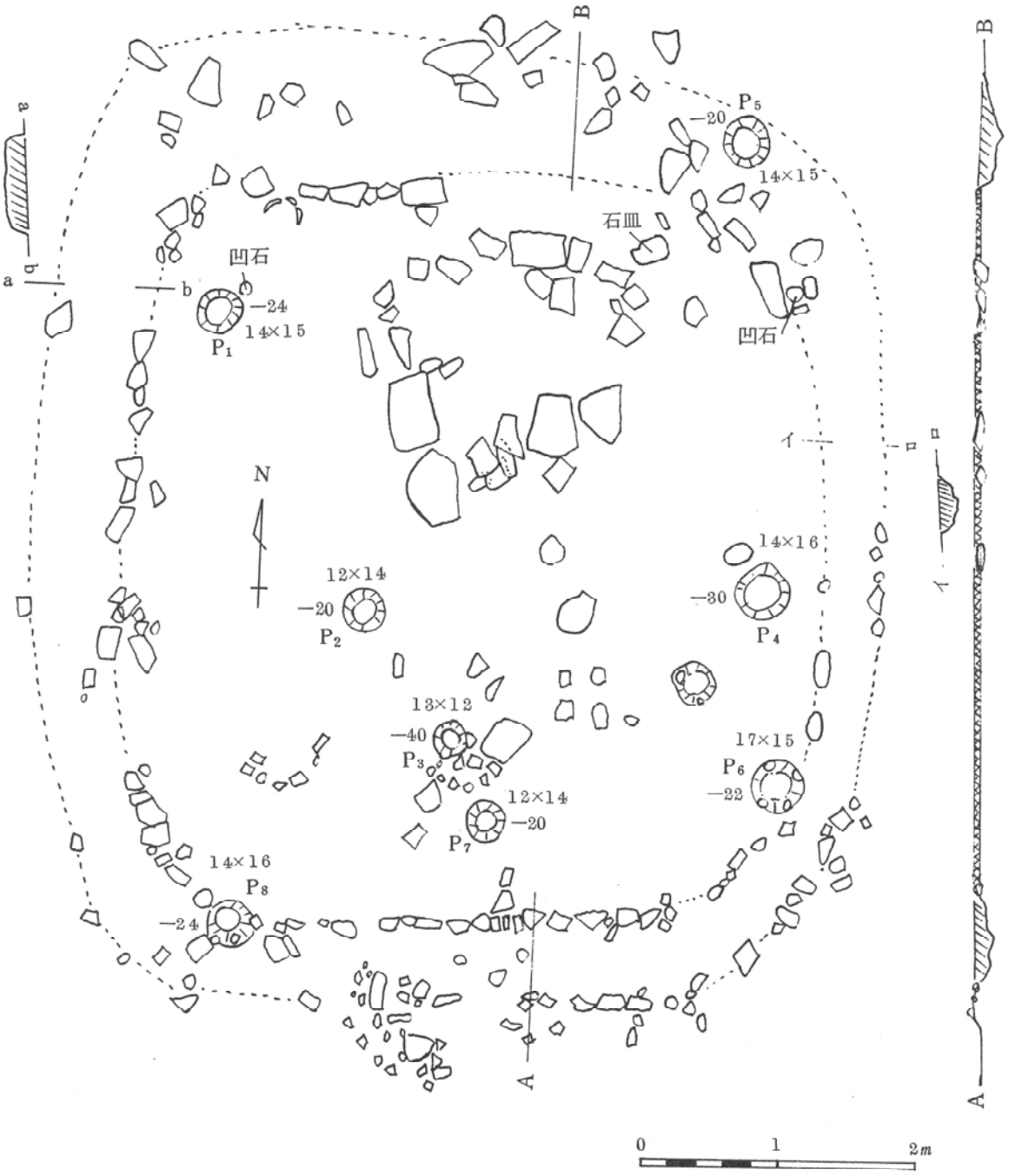
N地区の最も北側にある。周溝のあるすみとり方形のプランである。床面の南北５２m、東西５m、周溝は石を並べ崩れを防いでいる。その深さ、巾は所によって少々異なるが、巾は平均０８m、深さは０３～０４mぐらいである。床面に平らな石を並べかためているようである。敷石住居の手法がとられ、その部分（断面 ▨ の部分）だけ高くなっている。床面には炭化物が混入し、チョコレート状にはがれる。

柱状ピットはP_1～P_8まであり、深さは０２～０４cm、直径０１２～０１６mぐらいである。炉は確認されていない。

住居内から縄文土器片や凹石２個、石鏃等が出土している。

(2)　４号住居跡（第１３図　図版N３、N４参照）

この住居跡は、N地区のやや東側に位置しており８号住居跡の上に重なりさらに６号住居跡を切るような形で出土した。住居プランは円形に近く、南北６５m、東西６８mで円形をしている。炉は長径０９m、短径０７mで中央よりやや西側に寄った所に位置する。縁石などは認められず、柱は柱穴からして４本ないし５本と考えられ、各穴は径０４m、深さは床面より０３mから０６mの深さであった。住居をとりまく周溝などは認められず、床面に土器破片、小石などが散在し



第１２図　第３号住居跡（小形、茨木、横戸）

ている程度で全体的に保存状態はよくなかった。

(3)　5号住居跡（第14図　図版N5参照）

5号住居跡は、4号住居跡の南側に位置して検出された。長径7.4m、短形7.3mのほぼ円形のプランを示している。この住居跡は4号住居跡同様、周溝は検出されなかった。炉跡は中央よりやや西側にずれており長径0.8m、短径0.6mの焼土が確認されただけである。柱は柱穴の状態からして4本と推定されいずれも径0.5m、深さは床面より0.4mから0.5mである。床面の保存状態はよかったが、遺物はほとんどなかった。

(4)　6号住居跡（第15図　図版N6参照）

6号住居跡は前述した4号住居跡と5号住居跡に切られたような形で検出された。しかも床面が4・5号住居跡より0.2mから0.3m低いので、4・5号住居跡は6号住居跡の上に張り出して作ったものと推定される。柱穴と思われるものが3カ所検出された。

(5)　7号住居跡（第16図）

この住居跡は、6号住居跡のさらに西側に隣接して検出された住居跡である。焼土は長径0.7m、短径0.6mの大きさで残っており柱穴と考えられるピットも検出された、しかし住居範囲などは水田直下の為保存状態が悪く不明であった。なお完全な浅鉢が出土した。

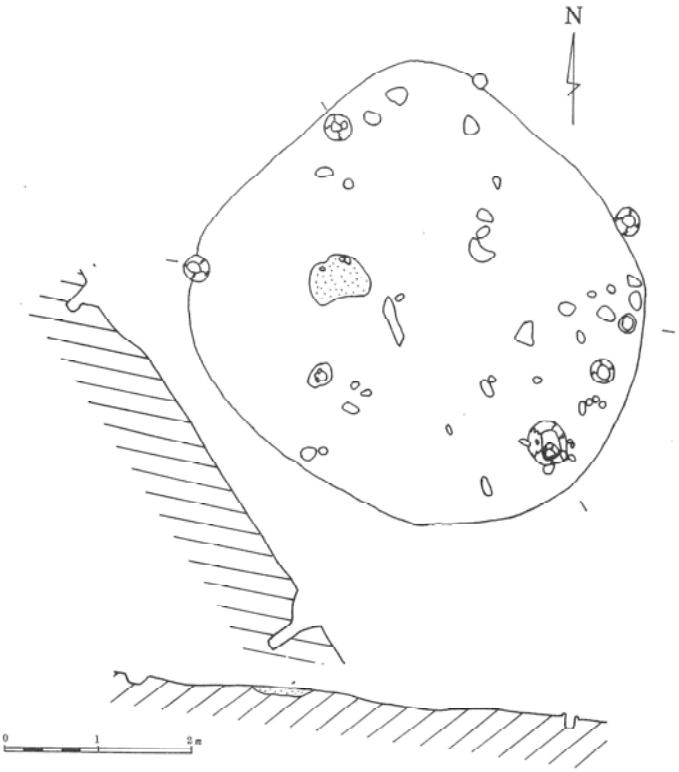
(6)　11号住居跡（図版N7参照）

11号住居跡はN地区東西セクションを掘る為に4号住居跡を東西に切った際、4号住居跡床面より0.4mから0.5m下で大木9式土器底部と焼土が検出され住居跡である事が確認された。しかし調査終了直前に発見された事や、激しい地下水の出水の為に詳細を記録しないで放棄した。

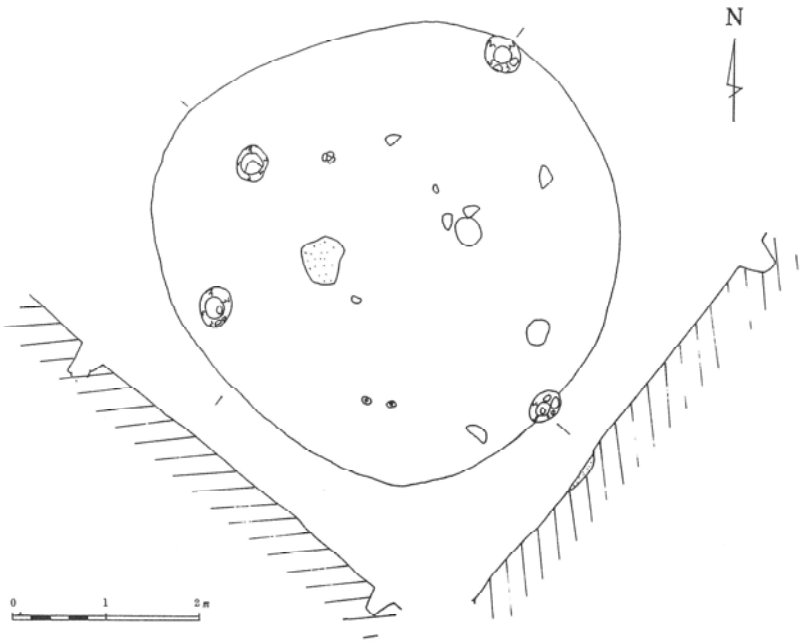
今回の調査は、遺跡の中で比較的高い地点を調査したのであったが、住居跡を除いて格別記録するような遺構は認められなかった。その原因は種々考えられるが、水田直下であった事、既に耕地整理、用水路工事などが行なわれていたため第一層、第二層については相当の面積についてかく乱の跡が認められたので、これらの事が原因となって保存状態が悪かったものと推定される。

第1表　N地区出土住居分類点

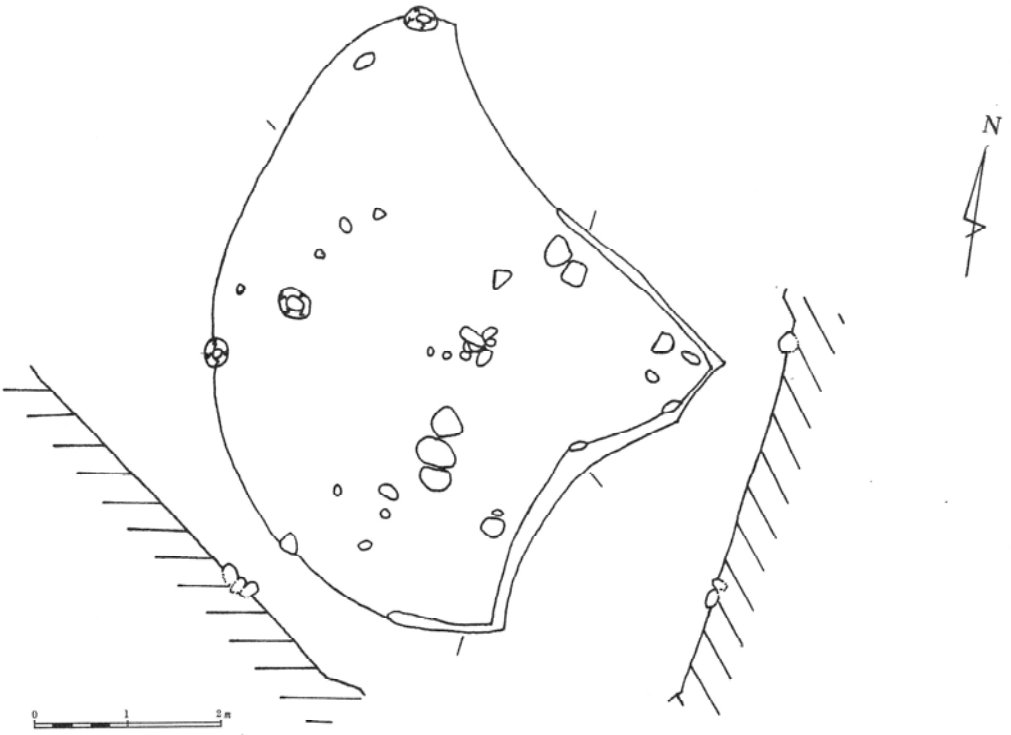
住居番号	時期	形	大きさ
3号住居跡	大木9式	すみとり方形	長径5.6m
4号住居跡	大木9式	円形	6.5m×6.8m
5号住居跡	大木9式	〃	7.4m×7.3m
6号住居跡	大木8b～9式	〃	不明
7号住居跡	大木8b～9式	不明	不明
11号住居跡	大木9式	〃	不明



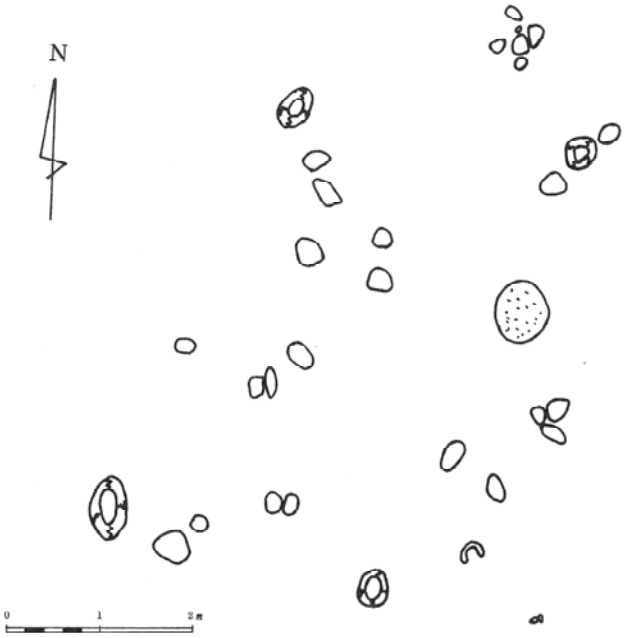
第１３図　第４号住居跡



第１４図　第５号住居跡



第１５図　第６号住居跡



第１６図　第７号住居跡

(7) 炉跡（第１７・１８図）

Ｎ地区の中央、７～８号住居跡の下、第Ⅲ層の下部に２つの炉跡が発見された。それぞれ、１号、２号と名づけている。

１号炉は長さ１.５ｍ×１ｍの大きさで半地下式石囲い複式炉である。北半分は石囲いだけで、多量の炭化物があり、ブロック状になっている。南半分は敷石され、炭化物がのっている。

２号炉は敷石、石囲い炉で１×１ｍのすみとり正方形に近いものである。

道路、須川～滑川線の北側、山形県庁敷地内では、図版Ｎ３７図（県文化課調査）のような土器を埋没した複式炉がある。１号、２号炉跡とも大木９式の土器とともに出土し、この時期、熊ノ前遺跡では、規模の大きい複式炉も作られていた。

２　土器について

Ｎ地区に於ける土器片の総数は、約２１,０００点を越えるぼう大な量でその内訳は第２表の通りであるが、ここに報告するのは、分類した中での代表的なもののみである。

第２表　熊の前遺跡Ｎ地区出土の土器破片総数

	文様有無	土層 1	土層 2	土層 3	計	%
口縁	有文	20(64.52%)	403(78.10%)	326(84.46%)	749	80.28
	無文	11(35.48)	113(21.90)	60(15.54)	184	19.72
体部	有文	478(88.19)	10705(87.27)	6891(89.97)	18074	88.30
	無文	64(11.81)	1562(12.73)	769(10.03)	2395	11.70
底部	有文	2(25.00)	15(11.45)	7(8.43)	24	10.81
	無文	6(75.00)	116(88.55)	76(91.57)	198	89.19
その他						
計		581	12914	8129	21624	

この表によると、数量の点では第２層、第３層、第１層の順に多く、土器の部分で見ると体部・口縁部・底部の順に多い。次に部分について詳しく見てみると、口縁部に於ては有文の第２層、第３層、無文の第２層の順に多く無文の口縁が最も少ない。これはこの時期に於ける土器の特色を示す一つの例と考えられる。体部を見てみると有文の第２層が最も多くついで同じく第２層、そして無文の第２層の順で、無文の土器破片が比較的少ない

傾向を示している。底部の数は口縁的・体部に比べて非常に少ないが中でも文様のあるものが各層ともに共通して少ない。なお出土した土器破片の形が小さいものばかりで大きい破片が比較的少ないという印象を調査期間中に得たがこれは熊の前遺跡が農作業によって相当に破壊されていたことを示すものと考えられる。

(イ) 復元された土器

復元された土器は4点である。いずれも完全とはいえないが器形がほぼ推定、あるいは一部が推定されるものである。

① N8図版はTヌの第2層下部に於て出土した注口土器である。口縁部の径40cm、体部の径43cm、高さは現存部分で20cmを数え、高さ約4cmの注口(径3cm～2cm)が口縁部に45度の角度で取りつけられている。文様は、体部の上半分から口縁部にかけて著しい文様が見られ、体部下半分は縄文のみである。体部に見られる文様は大きくレンズ状に文様を区分して内部に磨消縄文を施したものと、たてに区切って内部に磨消縄文を施したものが交互にありいずれも浅い巾(1.5cm前後)の沈線によって区画される。また口縁部の部分は巾2cm前後の浅い沈線を伴ない、口縁の一部は注口部分の口縁部へと延びている。体部下半分には炭化物が多数附着しており、この土器が使用時に於て直接火にかけられた事を物語っている。内側はヘラ状のもので整形されたようで、これは大木9式の土器である。また小形の片口壺形土器もある。高さ15cm、黒色、Sトレンチ三層から出土した。

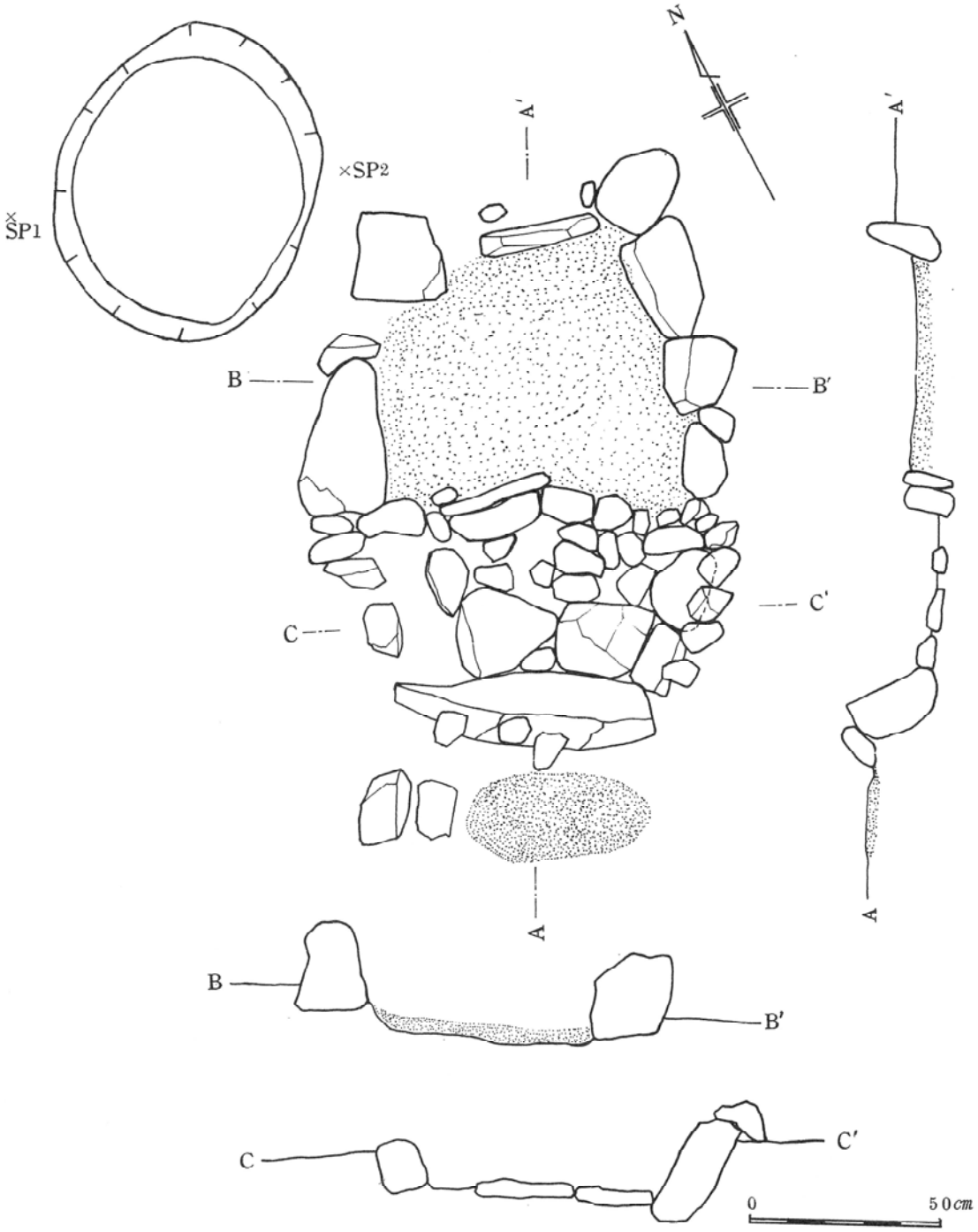
② 図版N9(出土状況図版Nオ)はNへの第2層より出土した浅鉢である。口縁の径18cm、高さ8cmの土器である。この土器は口縁部が一様でなく、古い土器を再生したものと推定される。体部はLRの縄文が施され使用時に於て附着したと思われる炭化物がところどころに見られる。

③ 図版N10(出土状況図版Nエ)はMトの第2層より出土した高杯状の土器である。現存部より推定すると口縁部の径が約10cm、高さは約13cm位である。口縁部にはレンズ状に区分された内部に磨消縄文が施されたものである。体部には縄文が施され2カ所に穴があいていたようである。おそらく祭祀用に使用されたものと考えられる。

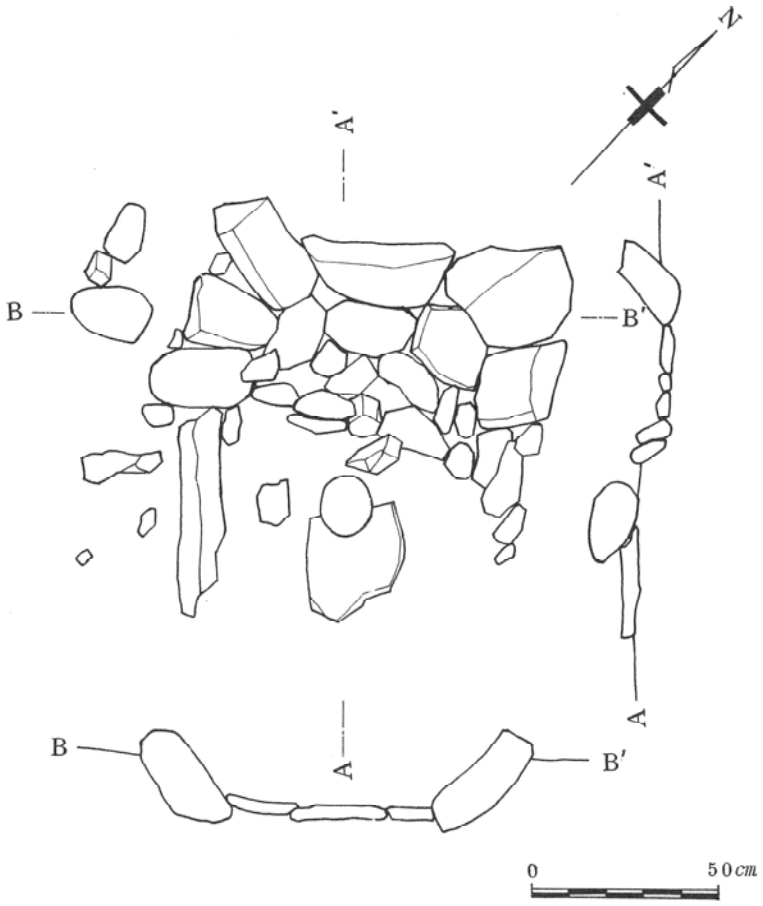
④ 図版N11(出土状況図版Nイ)はMトの第3層より出土した土器底部である。全体にRLの縄文が施されており深鉢の底部と推定される。

(ロ) 第2層の土器

第2層では大木8a式から大木9式までの各時期の土器が見られ、最も多いのは大木9式の時期である。代表的なものを分類してとりあげてみると



第１７図　Ｎ地区第１号炉跡



第１８図　Ｎ地区第２号炉跡

① 図版Ｎ１２

全体的には不明であるが、体部との接続部分に於て隆起線の見られた深鉢の把手である。時期的には大木８ａ式の頃と考えられる。右上の口縁部は、縄文を施文した上に隆起線を指で整形しながらはりつけたものと思われ、それぞれに数本の平行沈線が施されている。これは、隆起線を中心とした分類に入るものである。

② 図版Ｎ１３

いずれも沈線で描かれた施文である。右側はＬＲの縄文が施された上にヘラ状のもので平行沈線が渦巻に施されており、体部と口縁部のくびれた所にも平行沈線が施されていたと考えられるものである。左側は単口縁の部分に櫛のようなもので不規則に沈線が描かれたもので沈線を主した土器類に入るものである。

③ 図版Ｎ１４

上の図は余り大きくないが口縁部に渦巻文を伴ない、太い隆起線が走っている。線の接合部分は指でわずかではあるが整形したと見られ磨消縄文が施されている。下は同じく渦巻文を施したものであるが上とは対称的に沈線によって作られたもので渦巻を主した土器類である。

④ 図版Ｎ１５

大木９式～１０式頃相当と思われるものである。図上左すみは、把手ないし注口と思われるものを口縁部にもち体部にはＲＬの縄文が施されたものである。同中間は、口縁部にゆるやかなカーブをもつ波状口縁の一部である。やわらかな隆線をもち縄文が施文されている。図下段左すみは、不規則ながら平行沈線が施されている。同真中に見られる文様は、大きく外側に傾斜した口縁にヘラ状のもので渦巻文が施されているものである。同右は、棒やヘラ状のような工具で突いた刺突文の見られる土器破片である。

⑤ 図版Ｎ１６

上段真中は、口縁部の下に２列に棒によるものと思われる刺突文が走りそして低い隆起線下に縄文が施文されたものである。同下段右は、口縁部から体部にかけて指やヘラなどで整形したと思われる平行線が走りところどころに縄文が施文されているものである。同左は大きく区画された部分に縄文が施文されたものである。

⑥ 図版Ｎ１７

不規則に沈線がヘラ状のもので描かれたものである。図左側は磨消縄文が施文され全体に沈線で区画された文様の走るものである。

(ｲ) 第３層の土器

第３層の土器は第２層と同じように新旧が混在しており大木８ａ～大木１０式の頃までの時期のものを見ることができる。分類したもののうち主要なものを見てみると

① 図版Ｎ１８

上段は口縁部に２列に棒などで刺突された施文が見られるもので第２層、図の土器と同じグループのものと考えられる。同下段はＲＬの縄文が施文された上に渦巻文を伴う粘土帯が施文されたもので深鉢の体部と考えられる。

② 図版Ｎ１９

上段左側は口縁部より体部にかけての盛り上がった隆帯に指または棒と思われるもので圧痕を施文したものである。同右は波状口縁の先に向って低い隆起線が走るものである。

③ 図版Ｎ２０

上段左は、口縁部に伴なう渦巻文である。同右は、口縁部と体部に粘土帯のはりつけ文が見られる大木８ｂ式の頃のものと考えられる。図下段左は注口であるが、その右は口縁部の把手の役目を果している飾りである。図中段中と下段右は、口縁部の下に隆線がありそれより体部には沈線が施されているものである。

④ 図版Ｎ２１

上段は渦巻文の退化したものをもつ波状口縁の一部で、体部には縄文が施されている。中段・下段ともに沈線を主体とした文様であるが施文用具としてヘラ状のものと櫛状の２種類が考えられる。

⑤ 図版Ｎ２２

上段はいずれも波状口縁で、手で隆起したと思われる大きな隆起を持ち、その区画された中に磨消縄文が施文されている。下段左は口縁部にねじられたような形で粘土帯がはりつけられているものである。下段真中は口縁部に沈線が走り、体部には縄文が施文されるものであるがこれらは、浅鉢の一部と考えられる。下段右は、ごつごつとした感じの把手であるが真中に棒をさし込んだようなへこみを見ることができる。

⑥ 図版Ｎ２３

口縁部と体部に区分する沈線が走るもので図上段左、同下段左がこれにあたる。口縁部から浅い巾広い沈線が走り、曲線で囲まれる部分に縄文が施文されたものである。下段右は把手がついているもので体部より一段高い粘土帯が走り、体部に縄文が施文されるものである。これは器形からして注口と思われるものである。

⑦ 図版Ｎ２４（出土状況図版Ｎウ）

熊の前遺跡の標準型ともいえるタイプの土器破片である。焼もしっかりしておりゆるやかな波状口縁の下に　円形の輪が三重にとり囲み、その中に磨消縄文が施されたものである。体部との境には二本の隆起線が走り、体部には縄文が施文されている深鉢の破片と考られる。これは、隆起線を中心とした文様の土器類である。

⑧　図版Ｎ２５

Ｔヌで出土した土器と同じグループと考えられるが相違点も見られる。口縁部のところどころに指ではさみ出したような厚い把手があり、そこから大きく流れるようにカーブする１本の線を中心に巾広く浅い沈線が２本（両側に）、途中で口縁部におりかえしていくという文様である。隆線に囲まれた内側とそれに続く体部にはＬＲの縄文が施文されている。

㈡　その他の土器破片

①　図版Ｎ２６

Ｐへ第２層で出土した丹塗りの土器破片である。口縁部に指で整形したような感じのするつまみを持ち、口縁部と体部の境に沈線が走るものである。付近より丹塗りの凹石が出土しておりなにか特殊な用途があったものと考えられる。

〔３〕　土　　偶　図版Ｎ２７（出土状況図版Ｎキ）

Ｎへの第２層下部に於て出土したもので顔面のみである。焼成はよく裏側を見るとかつて体の部分があった事がわかる。大きさは、長さ６５cm、巾は４５cmである。かく乱された状態のため埋葬状態などは不明である。

〔４〕　土　　錘　図版Ｎ２８（出土状況図版Ｎサ）

このＮ地点では、５９個の土錘が出土した。わずか７００㎡の面積からの５９個であるが、その原因として考えられるのは、熊の前遺跡が馬見ヶ崎川扇状地でも最も水に恵まれた地点に立地したからであることを推定させる。今でも新県庁舎の東側は、わき水が多く魚などが自由に釣れる湿地帯である。ここで出土した土錘はいずれも土器破片を利用したものである。

〔５〕　不明な土製品　（出土状況図版Ｎケ）

いずれもＰへの第２層下部において発掘されたものである。

①　図版Ｎ２９（出土状況図版Ｎク）

両端とも折れた状態を示しているものである。残存部は長さ７cm、巾４cmで厚さは２５cmの土製品である。文様は竹管によるものと細い棒でつけたと思われる沈線が幾本が見られ、断面は　円形を示している。裏側は全く文様がなくヘラで整形した跡が見られるだけである。沈線の施され方からしてこの土製品は左右の巾が違うものと考えられる。

② 図版Ｎ３０（出土状況Ｎコ）

断面からして何かの先の部分が折れたものと考えられるものである。大きさは、長さ2.5cmで断面の長さも2.5cmで断面の形は　円形である。先端より1.2cmのところに0.3mmの小さな穴があけられている。

〔6〕 石　製　品

熊の前遺跡Ｎ地区において重要と思われる遺物は土製品が１１３点、石製品が１９７点で計３１０点を数える。そのうち石製品の内訳は次の通りである。

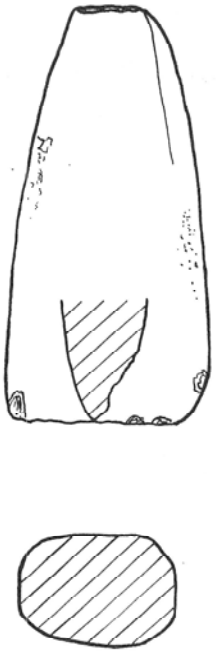
(イ) 石　斧	６点	(ロ) 石　鏃	４１点	(ハ) スクレーパー	５５点
(ニ) 凹　石	４４点	(ホ) すり石	１１点	(ヘ) 石　皿	９点
(ト) 石　皿	９点	(チ) 石　匙	９点	(リ) 石きり	７点
(ヌ) 不　明	１５点				

(イ) 石　斧　（第１９図）（出土状況図版Ｎシ、Ｎス）

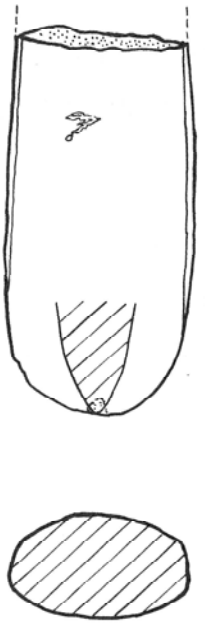
いずれも磨製石斧が出土している。石質は粘板岩を使用しており、完全なものは図(1)だけで他はいずれも破損している。大きさは完全な物で長さ１１cm、巾5.5cm、厚さは3cmで握りやすい形をしている。図(2)は上の部分で折れている為全体的には不明であるが、刃先の真中附近に使用中できたと推定される破損が見られる。図(3)はやや丸味をおびた刃先をしているがちょうど真中で折れている為、器形は不明である。図(4)～(6)はいずれも真中より刃先にかけて破損しているものであるが、石斧上部にたたいたと思われる痕跡が認められるものである。

(ロ) 石　鏃　（第２０図）（出土状況図版Ｎセ）

石鏃は４１点出土しており、そのうち黒曜石製のものが１点で、他はみな硬質頁岩製の石鏃である。大きさは、最も大きいもので3.5cm、少さいもので2cmで平均すると2.5cm～3.0cmのものが多い。器形として比較的多く出土したのは図(1)～(3)、(5)～(9)、(11)～(13)に見られる基部に「わたり」と呼ばれるものがあり両脚が先端から延びていく線上に形成された無茎の石鏃でこれらは２５点出土していれ。図(10)は基部にわたりをもちかつ矢柄に縛りつける為の剝離が施されているもので２点出土している。図(4)・(14)は基部に「わたり」を持たないタイプで器形全体が二等辺三角形、または正三角形の形を作るものである。この形の石鏃は２１点出土しており「わたり」を持つものの次に多く出土している。図(15)・(16)は楕円形に近を呈するが基部にフラットな面が見られ、先端部は丸くとがっている。断面はレンズ状に近く表面には細かい剝離の跡が見られるものである。これら石鏃は両面加

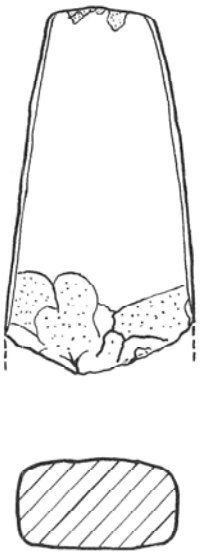


R＝ №11第2層
(1)

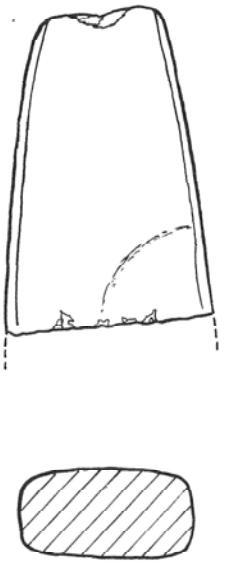


Rロ №19第3層
(2)

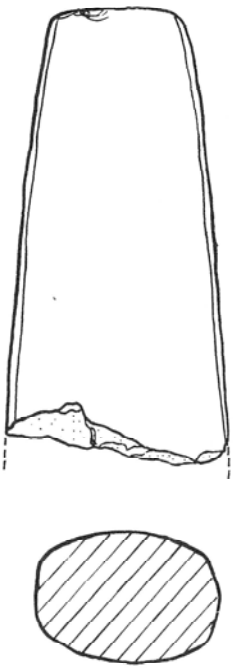
Rヘ №3第2層上面
(3)



O Oホ №15
(4)



Pハ №2第2層
(5)



5号住居跡床面より30cm下層
(6)

0　5　10cm

第19図　N地区出土磨製石斧実測図

Rリ №29
(1)

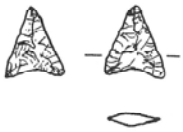
Oリ №13
(2)

Pイ №36第2層下部
(3)

Nイ №27第2層
(4)

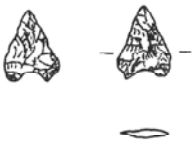
Mへ №35第2層
(5)

Pイ №17第2層
(6)



Nヌ №3第3層
(7)

Aイ－2（－60.5cm）
(8)

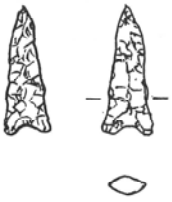


Oリ №14（黒よう石）
(9)

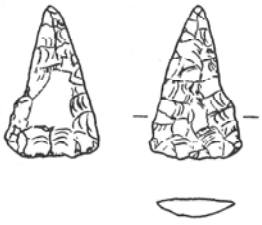
Oイ №31第2～第3
(10)

Rヌ №22第2層
(11)

Mホ №14
(12)



Aイ－2（－60.5cm）
(13)



Rイ №24第2層
(14)

Oへ №34第2層
(15)

Oへ №25第3層
(16)

第20図　N地区出土石鏃実測図

工されており、半面加工、先端のみの加工、周辺のみの加工といった中途半ば加工状態の石鏃はみられなかった。

(ヘ) スクレーパーと(チ)石匙 （第２１～２３図）（出土状況図版Ｎソ、Ｎタ）

スクレーパーは５５点と最も多く出土しており石材はいずれも硬質頁岩を使用して製作されている。スクレーパーは両面に加工が見られるもの(5)～(7)・(11)・(19)・(21)・(25)とされないものに大別されるが半面加工のものが７０％を占める。形を見るとやや平行四辺形に近く周辺の半分以上に加工面が見られるものがある。図(2)はこれに属し、他は長方形を呈しており先端部とその周辺に加工された剝離面をもっている。図(12)・(13)・(20)・(22)は先端、周辺ともに加工面を持ちこれらはナイフ的な機能面も備えたものと考えられる。また剝片を加工した石器も見られる。図(25)は１点だけであるが周辺に加工された跡をもちさらに握りを備えたもので石匙とも思えるスクレーパーである。

石匙では余り特殊な器形のものは出土しなかった。数的には９点と少なくいずれも「つまみ」を持ったものである。縦形はほゞ全部で大きさは１０cm前後である。石材はいずれも硬質頁岩を使用し図(19)を除いていずれもするどくなっている。

(ニ) 凹　石 （図版Ｎ３１）（出土状況Ｎチ）

凹石は全部で４４点出土しており、いずれも砂岩や安山岩を使用している。大きさは平均すると１０cm×７cmで断面は楕円形である。凹は両面にあるものが多く、たいてい２カ所の凹をもっている。４４点中１点が丹塗りであった。（図版Ｎ３２）

(ホ) すり石 （図版Ｎ３３）

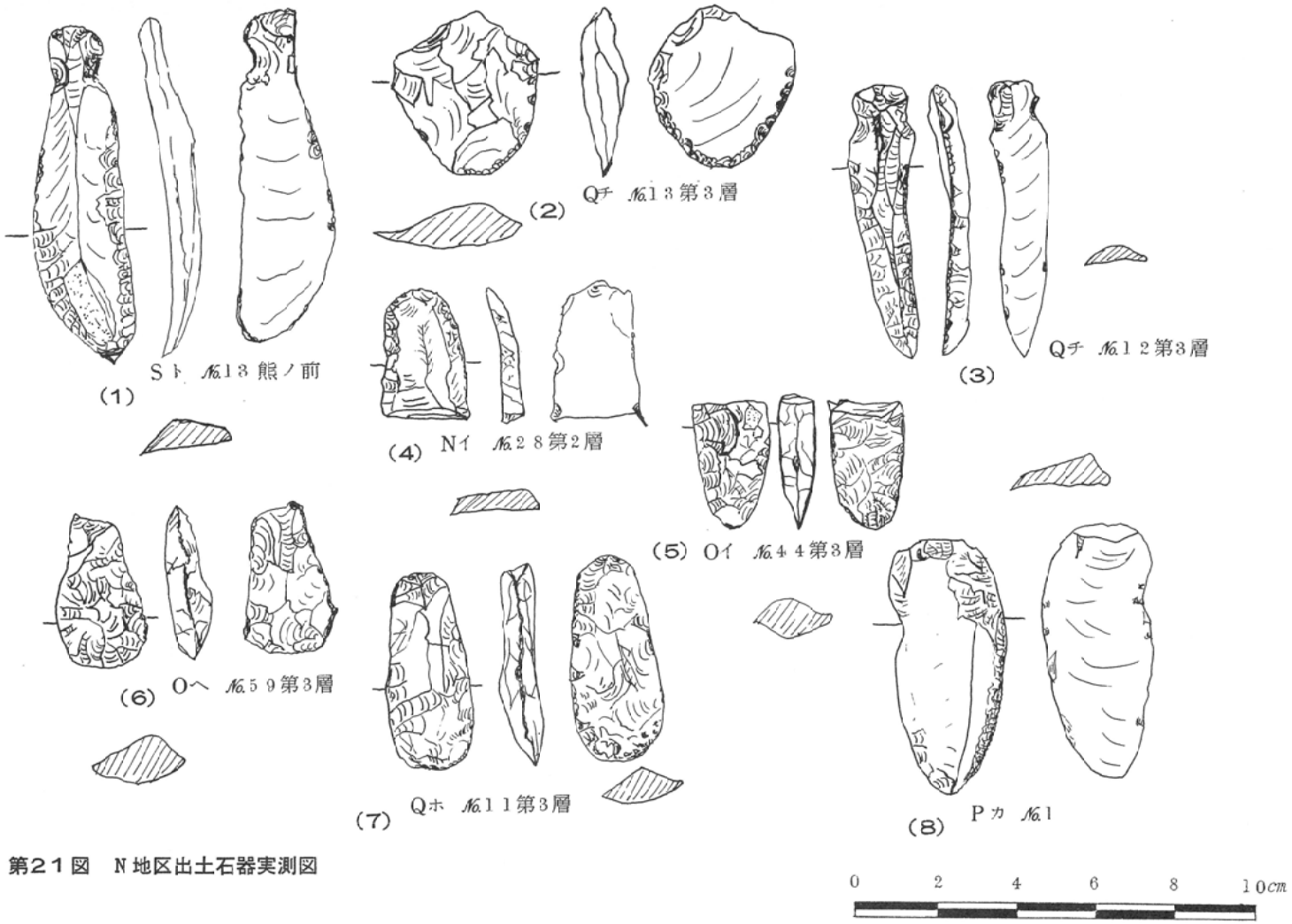
すり石は全部で１１点出土しておりいずれも河原石を使用している。大きさは、大きいものでも径３５cmで比較的小さい物が多いのが特色となっている。セットになる石皿は出土状態が不良の為不明である。

(ヘ) 石　皿

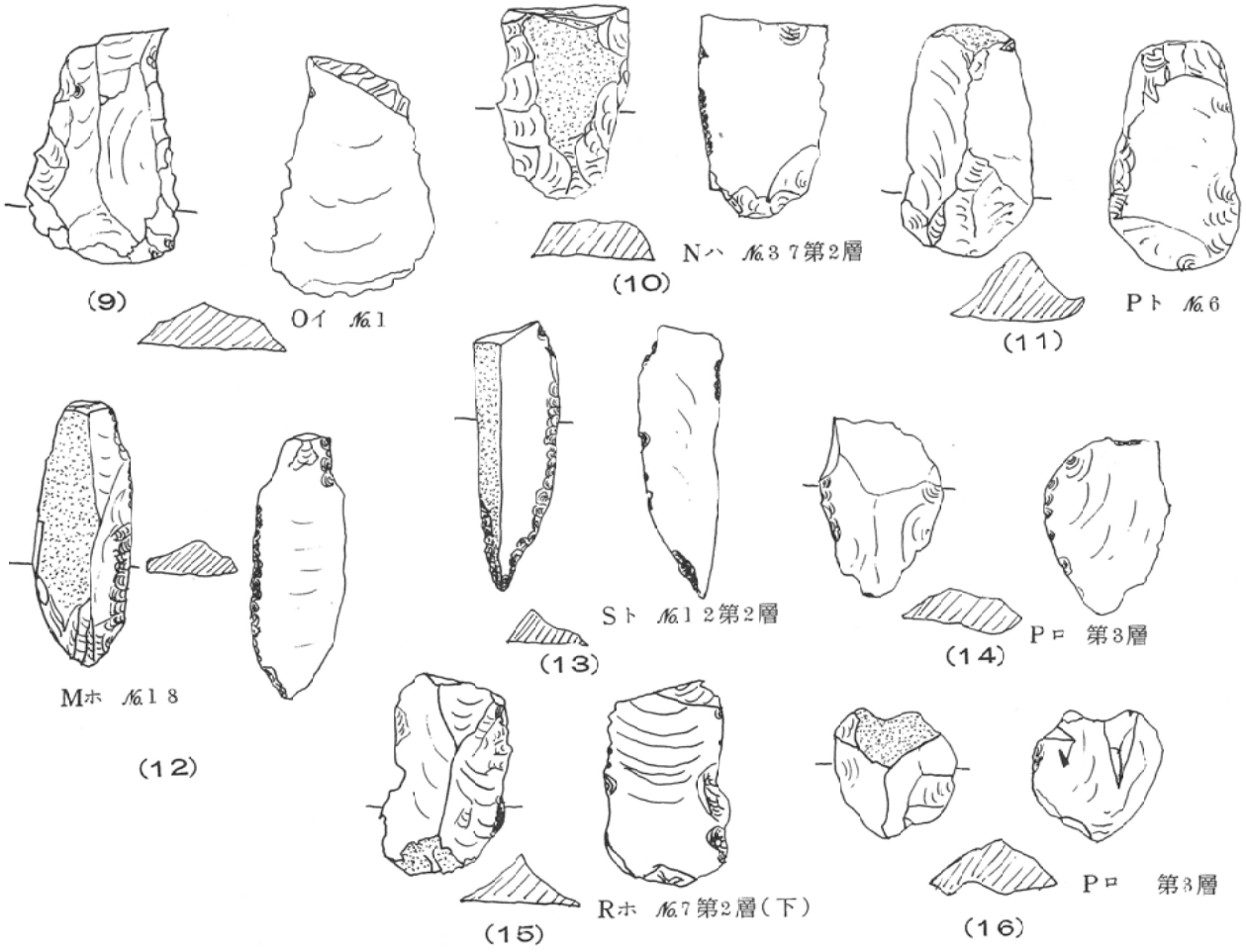
石皿は大小９点が出土しておりいずれも河原石の平な面を利用したもので、完全な石皿の出土は見られず安定性を欠くものばかりである。石皿９点のうち２点は台付石皿の一部で、脚がそれぞれ１カ所についている。一部分しかないので全体的には不明であり、推定するに２０cm～３０cmの大きさになり高さは１５cm位になるようである。

(ト) 石きり （第２４図）

石きりは７点出土しておりいずれも硬質頁岩を使用して作られている。器形は一部欠損しているが図(4)ように両端が使えるように加工したと思われるものもある。

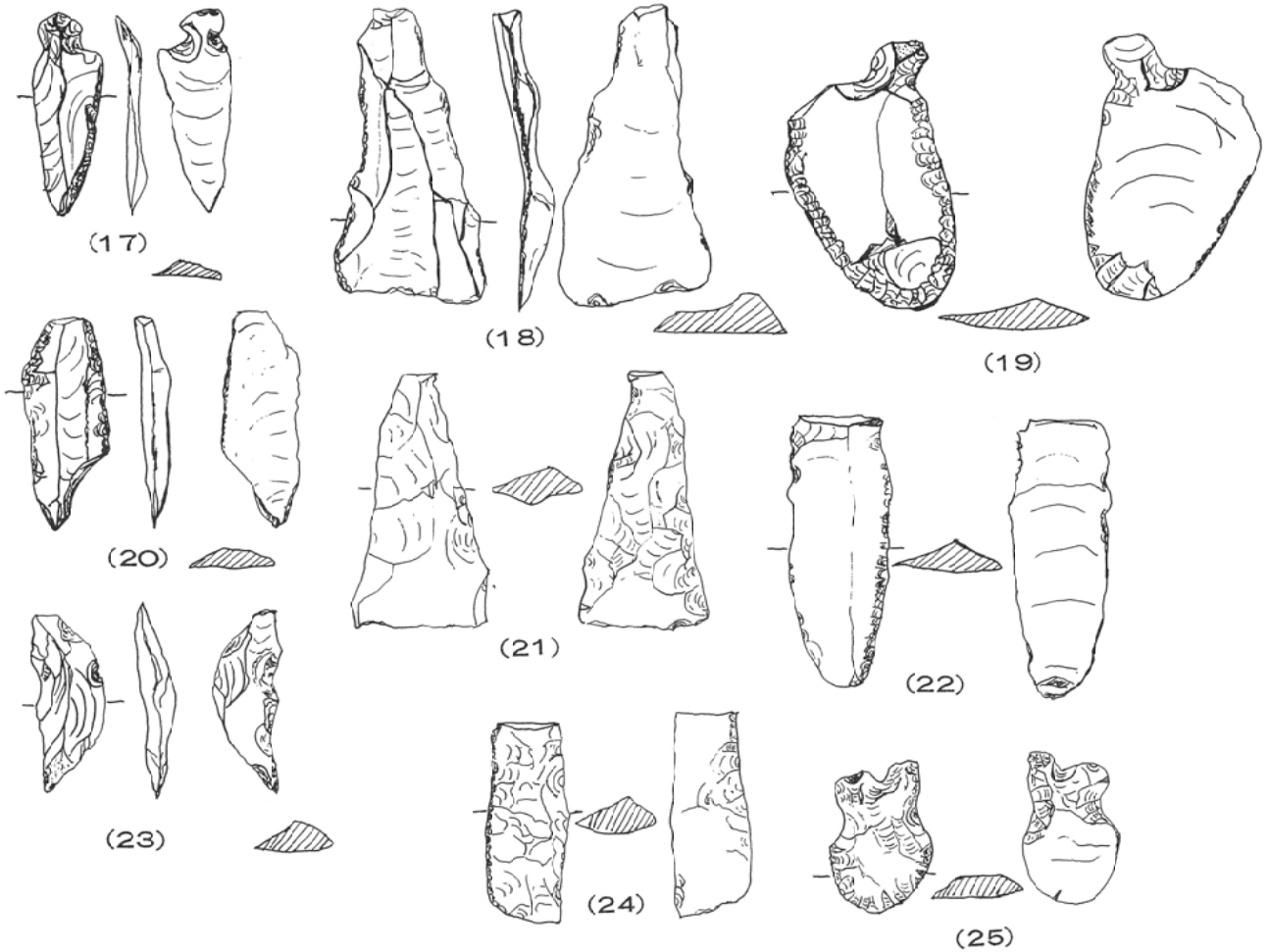


第21図　N地区出土石器実測図



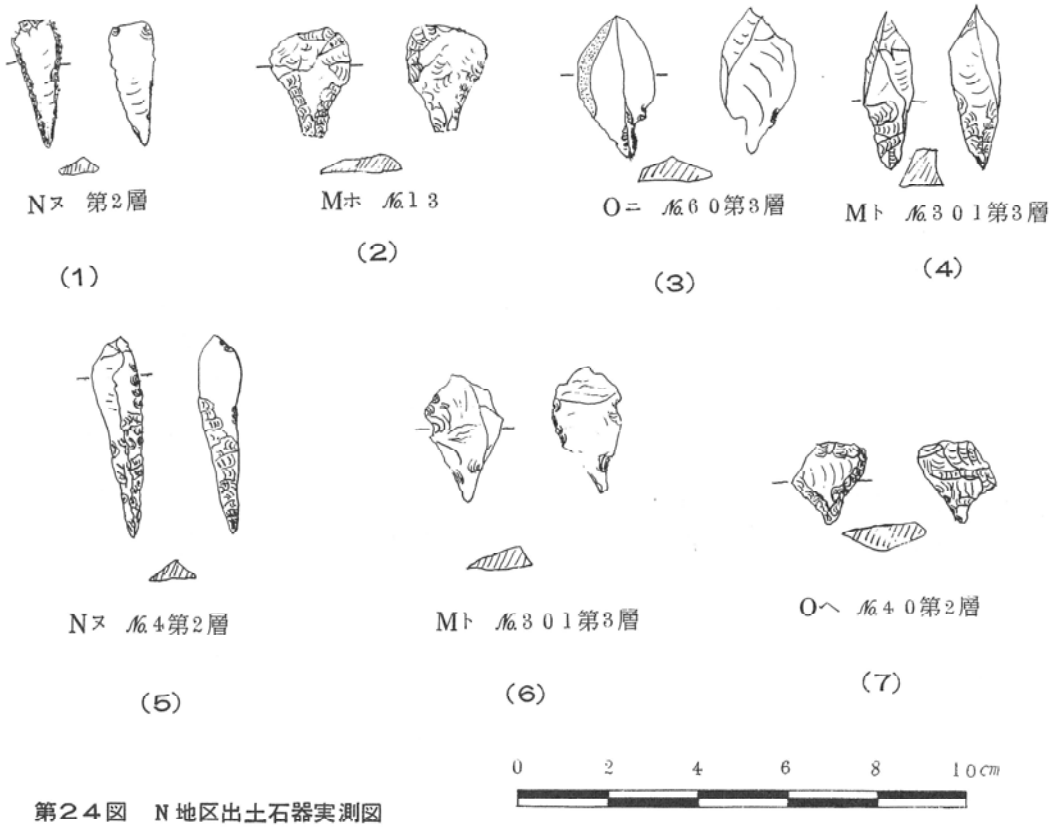
第22図　N地区出土石器実測図

0　2　4　6　8　10cm



第23図　N地区出土石器実測図

0　2　4　6　8　10cm



第24図　N地区出土石器実測図

Ⅶ C地区の遺構と出土遺物

(1) 遺　　物

石製品としては直径１６cm、厚さ１０cm、安山岩製の凹石２個と頁岩のチップ数片だけである。他は全て縄文土器片である。

C地区の地層

C地区の位置は前に述べた通りであるが、トレンチの広さは東西７m、南北４mである。A地区及びN地区同様、北側は道路開設の盛土のため人手では動かすことができないほどである。１２月の追加調査でショベルカーを使い、この盛土をとり除き後に述べるごとく、遺構面（第９号住居跡）が全面的に確認できた。

第２５図（Cトレンチ東西セクション）の一層は耕土層（水田）であるがⅡ層は、黄褐色がかったものが含む黒色色の土層である。Ⅲ層はより粘質がかった固い土層、Ⅳ層はⅢ層に小礫が含むような土層である。その下部は砂質がゝった黄褐色土層となり、砂質土層へとつながっていく。

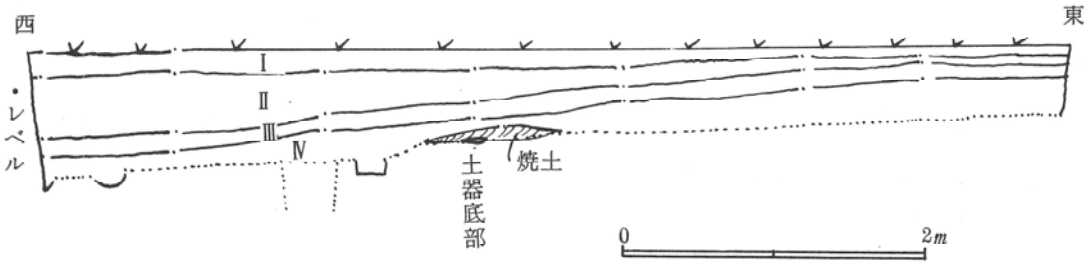
Ⅳ層が住居面らしく焼土と土器が底面に構築されている。扇状地のため、東に高く西が下る層となり、南北（第２６図）はそれほどでない。

(2) 縄 文 土 器

沈線磨消縄文の類図版C１はC地区拡張の部分から出土したものである。1.は６×６５cm大の口縁の装飾把手である。体部等については不明である。2.は斜縄文に沈線で幾何学的文様を描いたもの、原さは５mmと薄いが焼成がよく、深鉢形の一部である。1.、2.とも澄褐色を呈している。3.は、C１０の1.、2.と中間の分類に入る口縁に穴のある土器である。すり消しと縄文帯の境を沈線で区画するもの、磨消縄文帯は必ずといってもよいほど丸くしているのが特徴である。

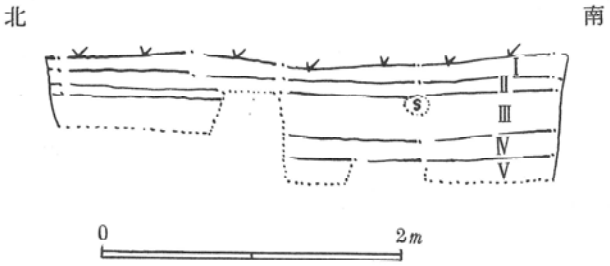
これに対し、4.、5.、6.の場合の沈線は、必ずしも円形に近い丸さを有しない。図版C２図は拡張部分でないC地区から出土したものであるが、図版C１図の３に近い土器である。厚さはいずれも５mm前後で焼成よく堅い。器形から推察し深鉢形と思われる。

C３図も同じ仲間の分類に入るが３のように縄文帯がごく細かく、突留がついているものもある。4.を除いては、細い縄文がついている。これらはいずれも、第Ⅲ層の下部からⅣ層に近いか、あるいはⅣ層にはいる地層から出土している。整理箱２個半の量である。



第２５図　Ｃトレンチ東西セクション

Ｃトレンチ、東西、南北断面図



第２６図　Ｃトレンチ南北セクション

隆起を主とする土器群

C５図の１、２、３、４、５及び、C６図の１～４、C７図の５、及びC８図の土器である。ただ、C５図の６やC６図の５、６は他の土器とほとんど同じ層、同じ場所から出土したため、同時に並べている。

C５図の各土器はC地区の第Ⅳ層、Ⅲ層とⅣ層の中間に一部赤土層が含んでいたが、この赤土層の下から出土している。いずれの隆線も貼付文ではなく隆起文である。C５図では磨消の手法を使っているものだけであるが、C６図やC８図では磨消帯が少ない。特に、C８図は東西セクション面のⅣ層下部から出土したものである。

このC８図とほゞ同じ面、層に当る位置から出土したものがC７図の土器であり、C７の５とC８図の土器、C６図の１～３の土器は同一個体に近いほどの類である。C７図の７は土器底面であり、焼土の中から出土したもの、他の破片はそのまわりから出土したものである。

C６図の５を除く土器は灰褐色あるいは黒色に近い色調で薄いもので７㎜、厚いもので１.２㎝もある。たゞ、口縁体部、底位あるいは文様帯によってもちがってくる。いずれも焼成よく堅い。破片数は大小様々で、整理箱２個ほどである。C６図の５は磨消縄文帯が渦巻状に残すもので、前記の分類の類とも異なっている。この仲間が６８点もあり、かなりの量である。

C４図の土器片はほゞこの類の仲間に等しいものであろう。１は左傾斜縄文で灰褐色を呈し、雲母が入り、７㎜堅い焼成である。２は左傾斜無節縄文。３はより糸押圧文。４は複節斜縄文。５は磨消縄文。６は磨消縄文隆線文の土器である。厚さはそれぞれちがっている。破片の大小様々だが、６２片ほどの量である。

撚糸及び突き刺し文の類

C２図はC地区のうち拡張の部分、住居跡のうち北半、第Ⅲ層～第Ⅳ層に近いところから出土したものが多い。１は胫部に羽状に刺突文がある。２は口縁帯に短い撚糸を押圧し、体部には斜縄文を施している。３は縦に円状棒状の器具で軽く刺突文を施している。４は１の仲間。５、６は縦に細い無節撚糸文を走らせ、５には隆線文がみえる。

この類は割合いに厚く、８㎜から１２㎜まである。褐色や赤銅色など明るい色調のものが多い。この類は９０点以上、整理箱３分の１程の量である。

斜行縄文の類

C８のうち左５破片は１個体、右４破片が１個体の部分である。いずれも粒の細い　傾斜の縄文が主体である。黒色を呈し、厚さ５㎜で堅い。破片数４８片ほどであまり多い方の類ではない。

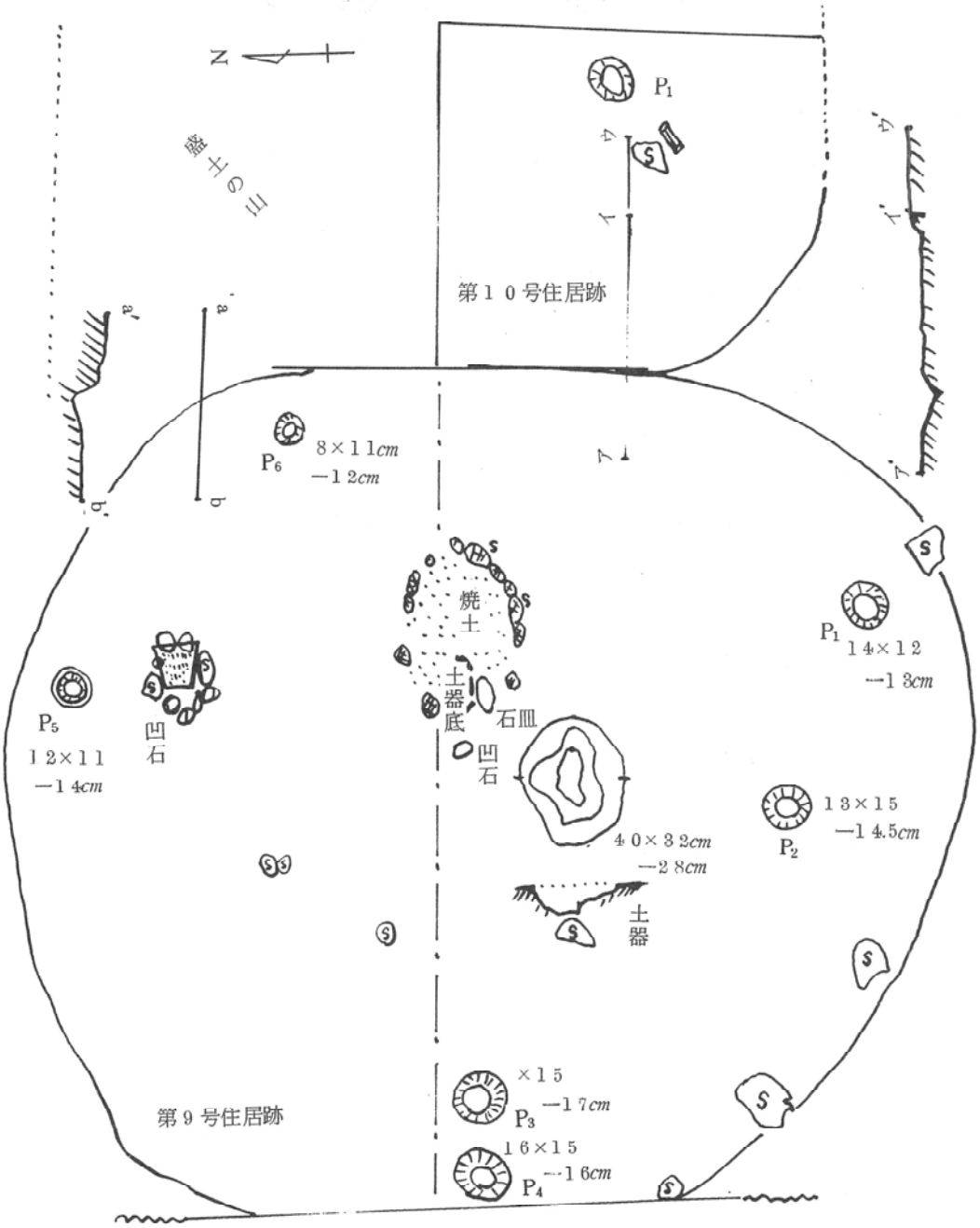
⑶ 遺　　構（第２７図、図版Ｃ１１）

第Ⅳ層、黄褐色土層（第１図参照）の底面に炭化物を含む焼土のかたまりを発見した。焼土は１６個の丸石及び長方形の石で囲まれ、その形は楕円形状の石囲い炉である。この炉の西隅には凹石１個と石皿、土器底部及び破片が混入していた。（図版Ｃ７）炉の長径１ｍ、短径７２cmである。

炉の南西の方向には４０×３２cm、深さ２８cmの貯蔵穴状の遺構がある。一方、炉の北の方には前記、Ｃ１０図の土器が囲まれていた遺構がある。

柱状ピットは６個確認されている。発見の順にＰ１～Ｐ６と名づけている。それぞれの直径及び深さは、１４×１２・１３（以下、深さを示す）１３×１５・１４.５。１５×１５・１７。１６×１５・１６。１２×１１・１４。８×１１・１２cmである。プランは南北５.６ｍ、東西４.８ｍで円形をくずした形となる。この住居跡を第９号と名づけているが、その東側の住居の１部を第１０号住居跡と名づけている。９号と１０号は重なっているが特に、１０号の床面がまわりの排水溝よりも高くなっている。

９号及び１０号住居跡についてもそのプランつまり、床の周囲はほゞつかめたが、竪穴の構造云々については明確に把握することはできなかった。



第２７図　第１０号住居跡（Ｃ地区）

Ⅷ D 地区の遺物

前述のトレンチ配置図（第 4 図）でもわかる通り、A・N地区とC地区の中間にD地区がある。約1m程の段状地形の上にあり、2×4mのトレンチである。地層はC地区とほぼ同じであるが、第Ⅲ、Ⅳ層の中にも丸石が混入している。第Ⅴ層になれば一層礫が多くなり、地下水が高くなる。

遺物包含層は第Ⅲ、Ⅳ層が主で遺構の確認はできなかった。

(1) 遺　　物

出土遺物は土偶の破片1個と縄文土器片80点を数えることができる。

磨消縄文の土器類は、D1図、D2図、D3図の1、2は磨消縄文の土器である。D1図の1、2、3、6、7は口縁部破片、2は口縁と体部の隆線にきざみを入れている。D3図の1のように豆ねじりのような磨消帯もある。　縄文帯との境はわずかに隆線状を示している。D3図の4、5もD1図の8やD2図の1、3、4のように、磨消縄文の土器と同じ類と思われる。いずれも褐色あるいは灰褐色を呈し、雲母も少々混入し焼成よく堅い土器である。

沈線及び撚糸文の土器類は、D2図の5が撚糸文を縦に押圧した土器で黒褐色を呈し、厚さ1.1cm、雲母が混入し堅い土器である。D3図の3は縄文を地文とし、竹篦状器具の先端で半円孤を描いた土器である。色調や胎土、焼成など他の土器とほぼ同じである。

D2図の6は底部は、どの類か不明である。土偶は、　D4図が土偶の体部破片である。左が表、右が裏である。表には中央に楕円形ほかの文様も沈線を利用している。体部中央の巾4.5cm、厚さ2.1cm、雲母が混入し焼成よく褐色を呈している。

地形的な条件もあり、遺構は全くつかめなかったが、流れた遺物だけとも考えられない破片である。

Ⅸ 総　　括

山形市熊ノ前遺跡は馬見ケ崎川扇状地の中央、前田堰と笹堰の周辺にある。遺物が連続的に散布する最大の範囲はおよそ３万㎡におよぶ。今回の調査はその３分の１のうちの中心地区と推定される所にトレンチを設定し調査をしたに過ぎない。

扇状地であり、階段状地形や用水堰、浅い地層などの理由から保存状態がわるく、竪穴壁の有無や炉跡など遺構の確認がむずかしい。さらに、水で洗われている土器等もあり、接合分類が非常にむずかしい。土器の量は整理箱５０個、石器及び石製品、石片など整理箱５個と大量に出土した。

Ａ地区やＮ地区では、ごくわずかに大木８ｂ式に相当する土器がある。多くは大木９式に相当する仲間の土器である。大木９式に相当する土器の中には、磨消縄文系統のものが最も多く、沈線文や斜縄文土器も少量ふくんでいる。

磨消縄文系統の土器でも大別すると、磨消帯と縄文帯の境がわずかに隆線または隆起をおびているものと沈線によって区画されるものがある。大木９式にも新旧あるという説もあるが、当地方において、そうすることが妥当かどうか、意味があるかどうか、検討を要する課題である。本遺跡においてもその原理が確認できず、むしろ混在していると考えられる。

特色あることといえば、注口土器や片口（図版Ｎ３４）の土器が出土したことである。さらに穴窓のある台付土器（図版Ｎ３５）が出土している。これらは、磨消縄文土器である。

次に、土錘が多く出土している。笹堰などの用水堰は馬見ケ崎川の上流であがる自然堰であり、古くから西流していたものと考えられる。地層の中に、時折、薄い砂層が入ったりするのは、こうした小川の氾濫層であろう。土錘が多いのは、遺跡周辺にこうした小川があることによるものと考えられる。岡山遺跡などでは石錘が多く出土しているが本遺跡では石錘は見当らない。

住居跡と炉跡であるが住居跡は１０号まで確認でき、１１号は４号の下にあることだけつかむことができた。１号、３号、９号住居は全面調査ができた。特に、３号住居では敷石や周溝のある構造をしている。敷石は平らな石を並べ床面を固める役割をはたしている。この敷石の厚さの部分３～５㎝自然面よりも高くなる。

１号や９、１０号住居においても、周溝とはいえないが排水を考え周りを低くしているのが特徴的である。　県文化課で予備調査をした県庁敷地内の住居においても周溝が認められる。たゞ、竪穴式の壁などの部分は、　地層が浅いためか、あるいは構

造が粗末なためか不明である。しかも、住居は同一時代であっても、重なりあっており移住生活のようすがうかゞわれる。

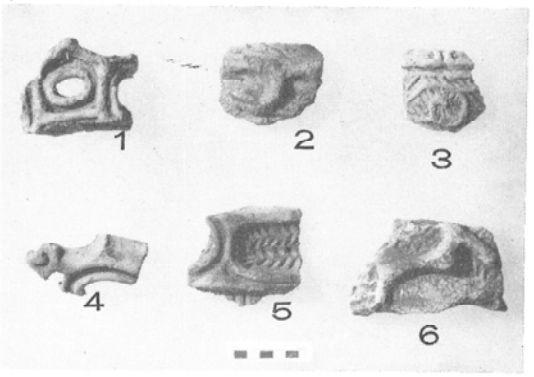
炉跡については、９号住居のように、石囲い式の簡単なものやＮ地区第１号炉跡のように大きい複式炉もある。２号炉跡も大型の石囲い炉である。県庁敷地内でも土器を２個利用し石でかためた複式炉が発見されている。

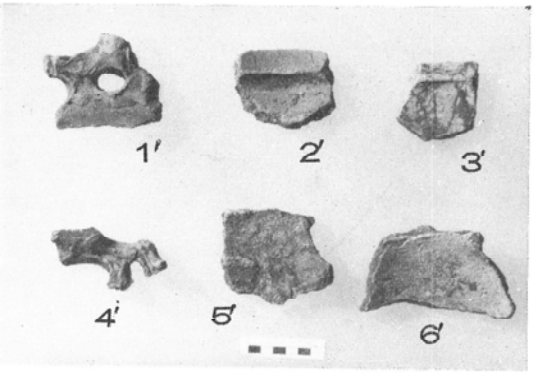
石囲い炉や土器を利用した炉は、これまでも長井市宮遺跡や白須賀、片松野、岡山遺跡等々で発見されてきた。本遺跡での大型炉の機能は何か、集落群とどういう関係にあるかなど今後の課題である。

編年上の問題、集落上の問題、遺物の機能、形態など、縄文中期末の課題を提供しており、今後解明されるための手がかりを得ている。

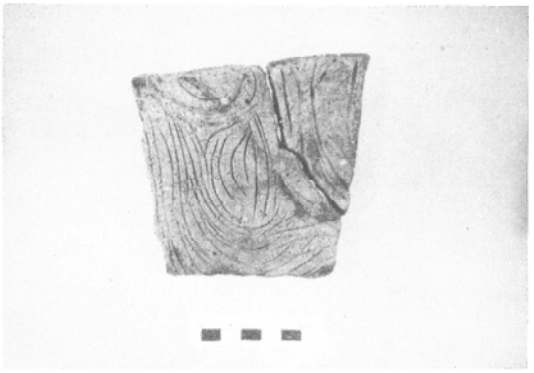
注 (1) 福島考古学会編「福島考古」第３号　１９６９年
林　謙　作「大木９式土器の検討」紀要６号　１９６８年
(2) 山形県文化課著「岡山遺跡」山形県教委　１９６９年
(3) 同　「第１次調査報告書」

図　　版

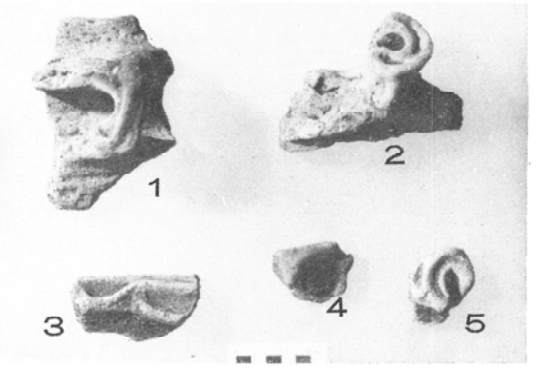




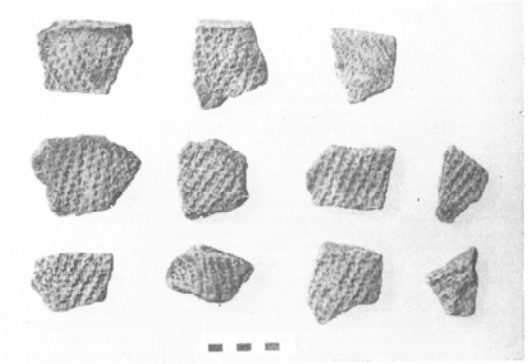
A 1 図



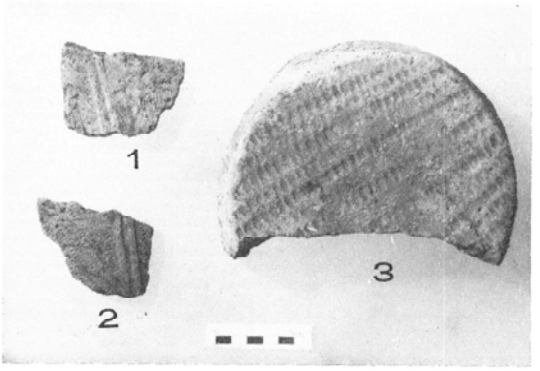
A 2 図



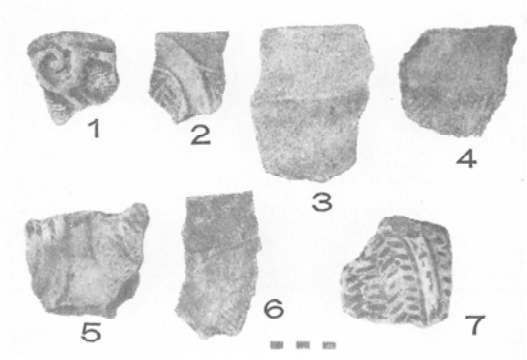
A 3 図



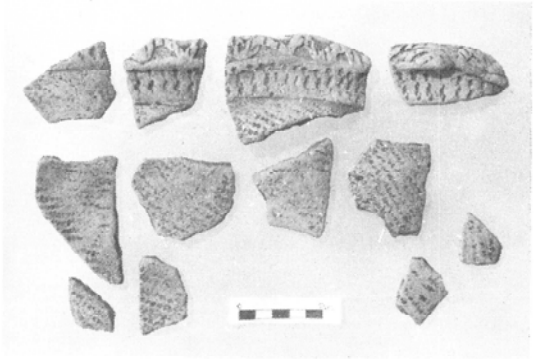
A 4 図



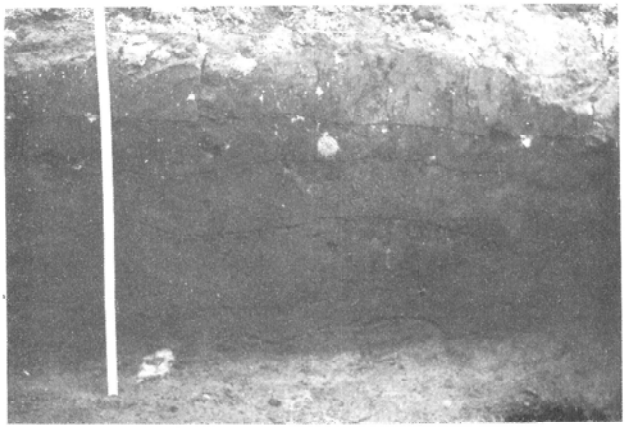
A 5 図



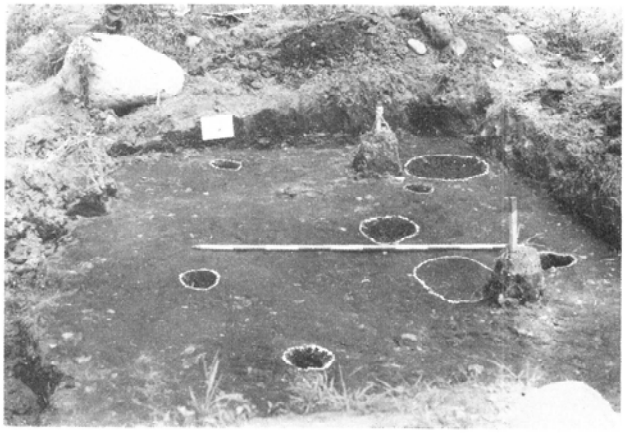
A 6 図



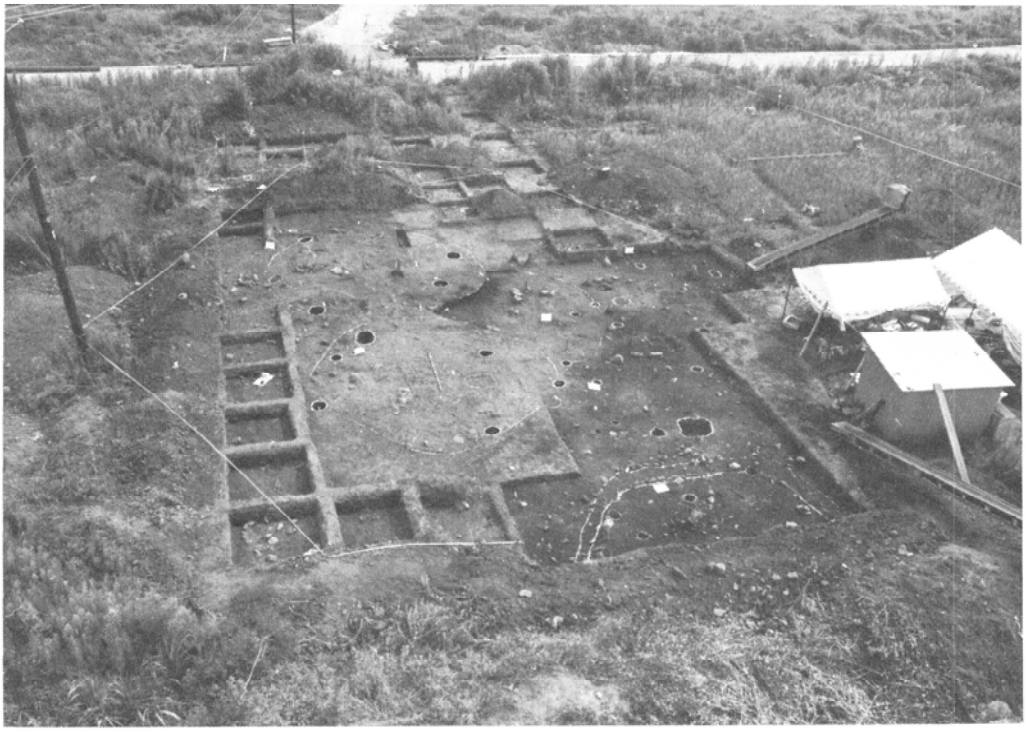
A 7 図



A 8 図



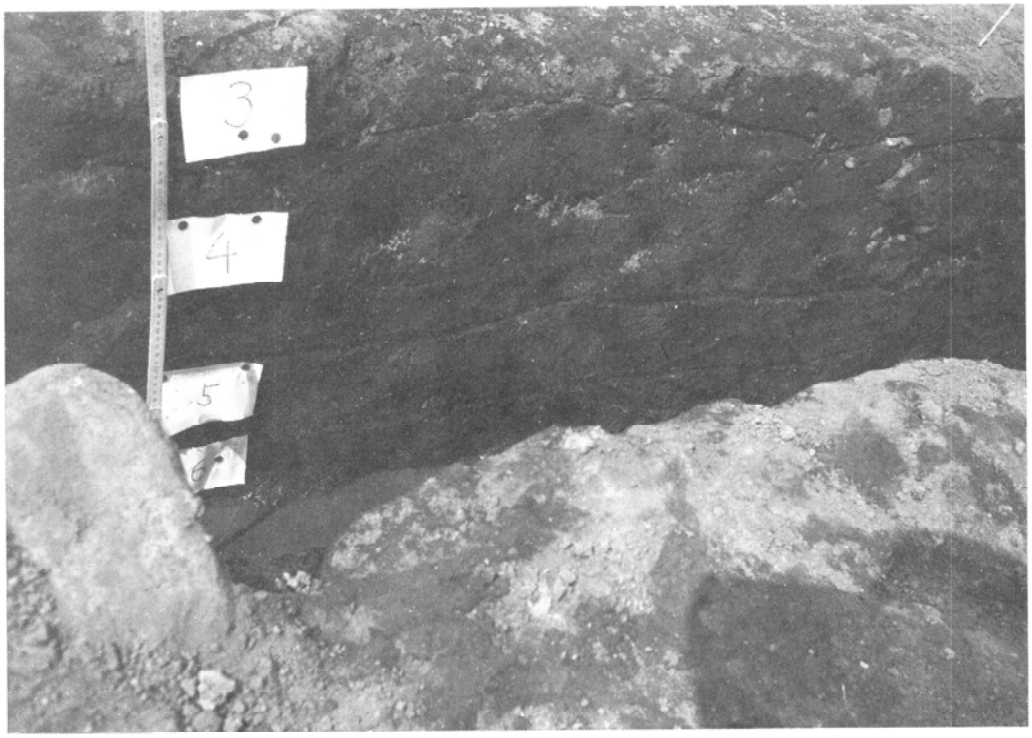
A 9 図



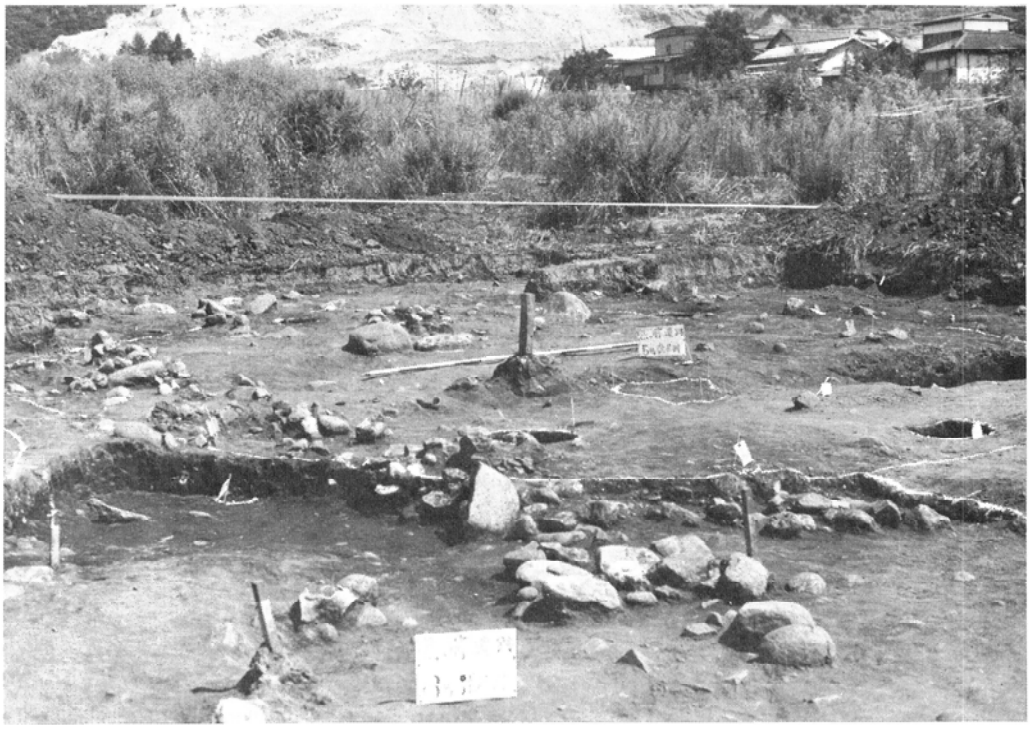
N１　N地区全景

N２　第3号住居跡（北西側より）

N3　第4号住居跡（西側より）



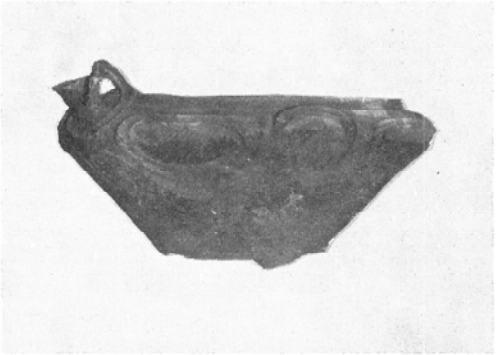
N4　第4号住居下の東西セクション



N5　第5号住居跡

N6　第6号住居跡（手前）

N7図



N8図

N9図

N10図

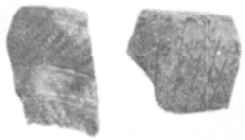
N11図

N12図

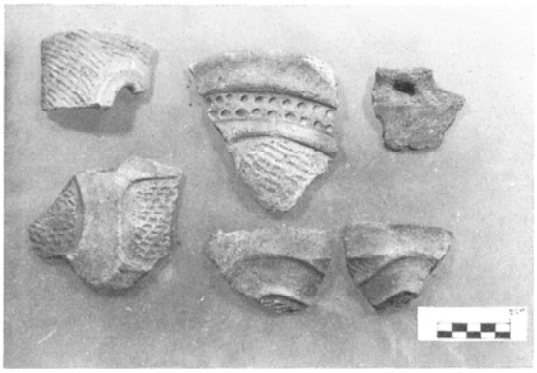
N13図

N14図

N15図



N17図



N16図

N18図

N19図

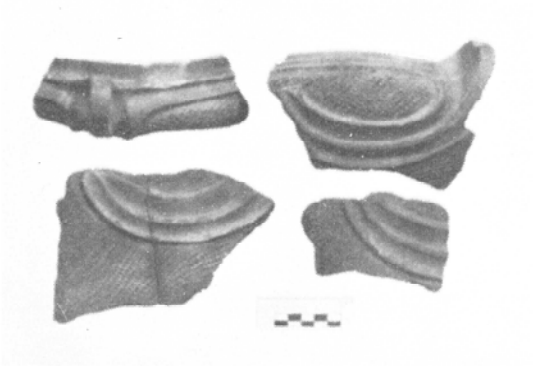
N20図

N21図

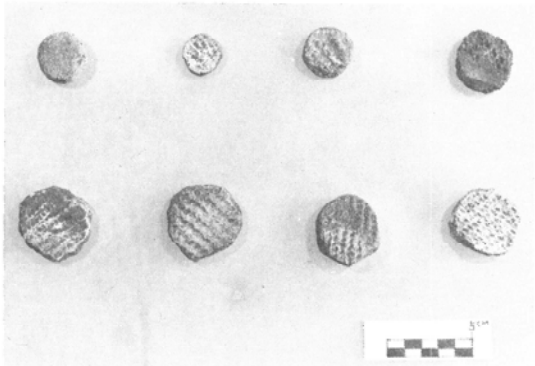
N22図

N23図

N24図



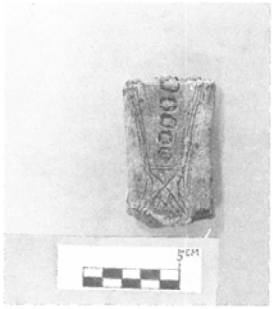
N25図



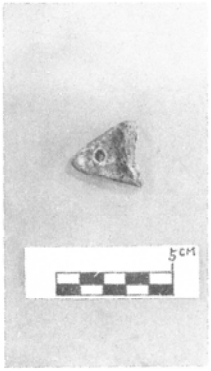
N28図

N26図

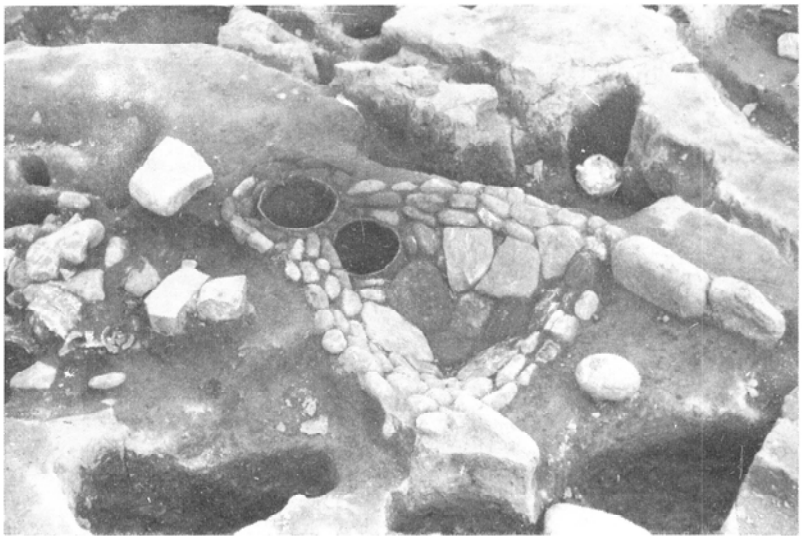
N27図



N29図



N30図



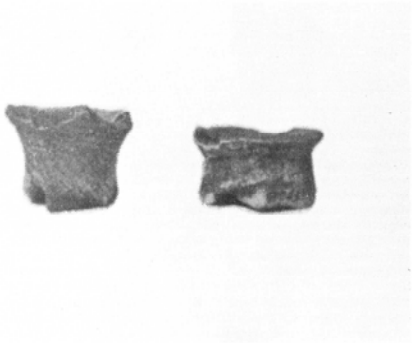
県庁敷地内で発見された複式炉

Ｎ３１図

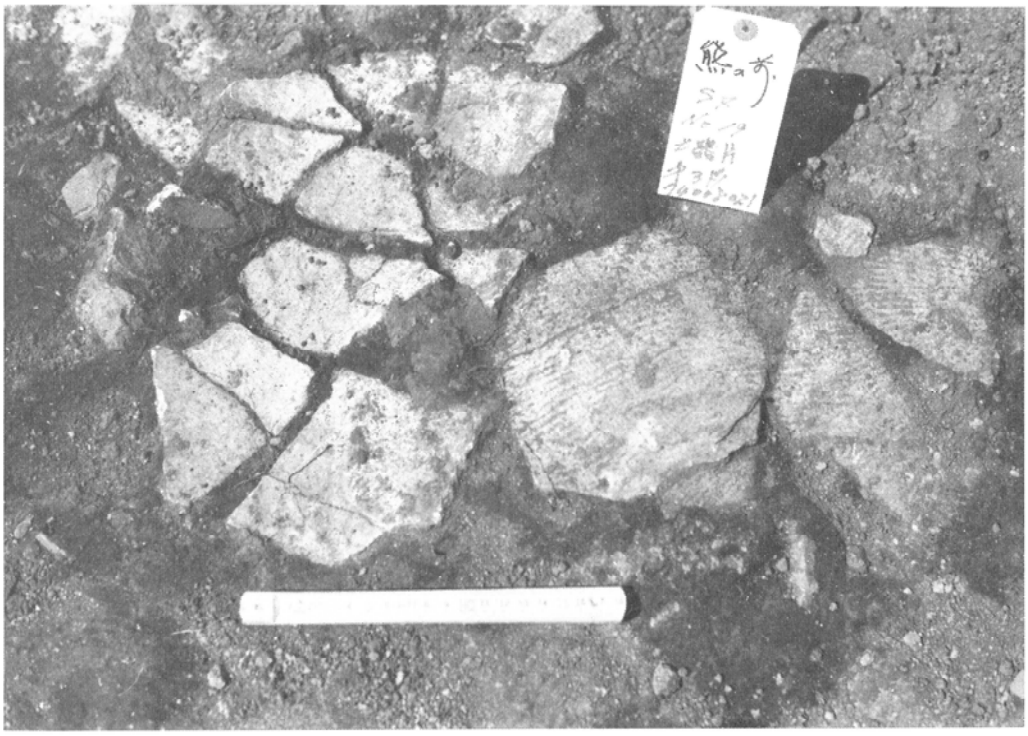
Ｎ３２図

Ｎ３３図

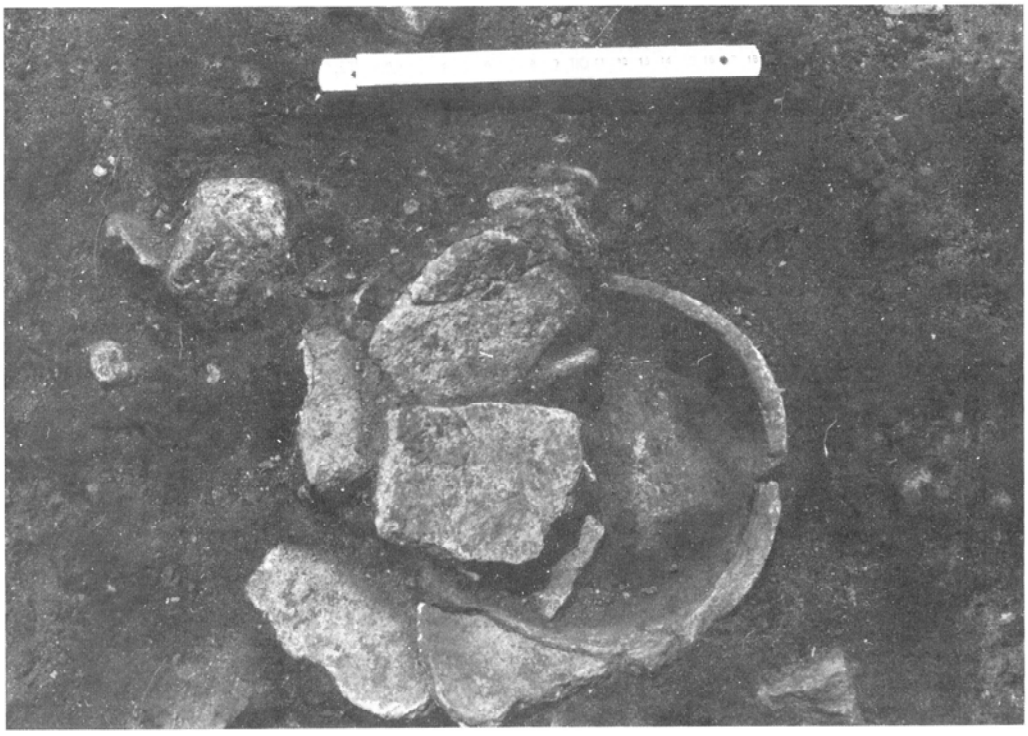
Ｎ３４図



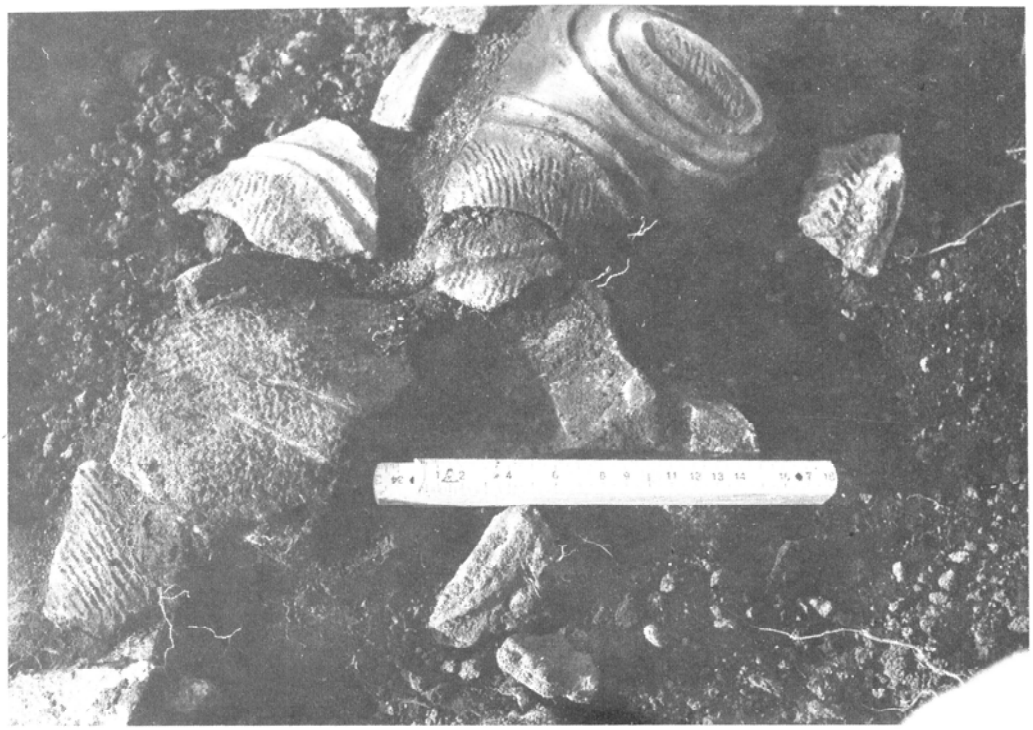
Ｎ３５図



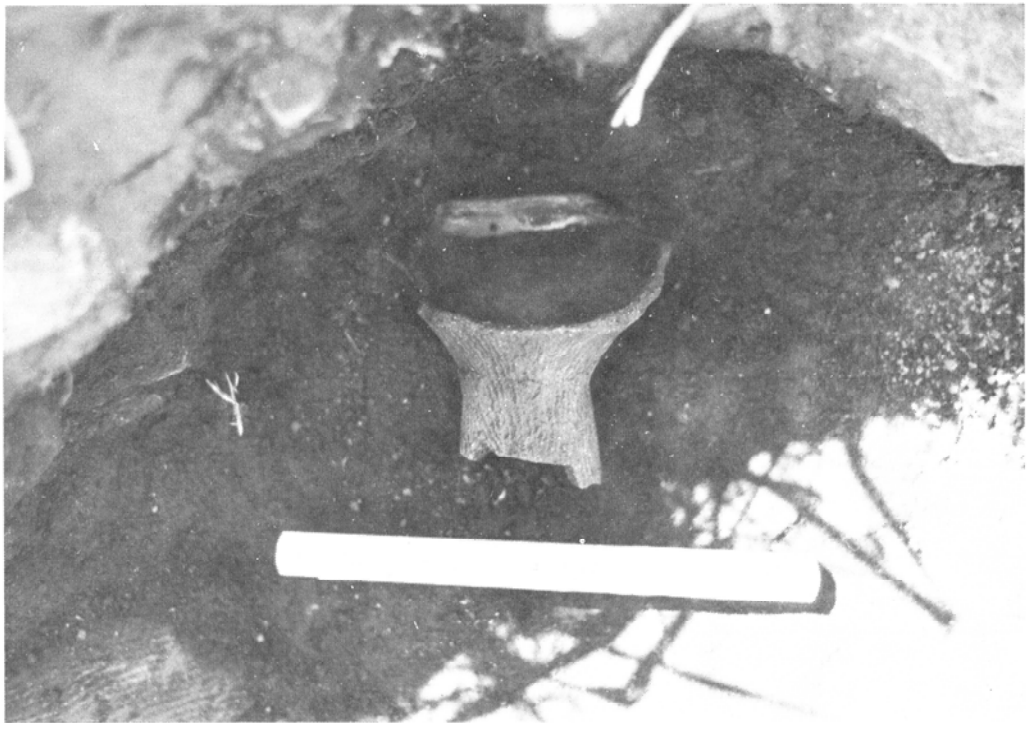
Ｎア　土器破片の出土状況



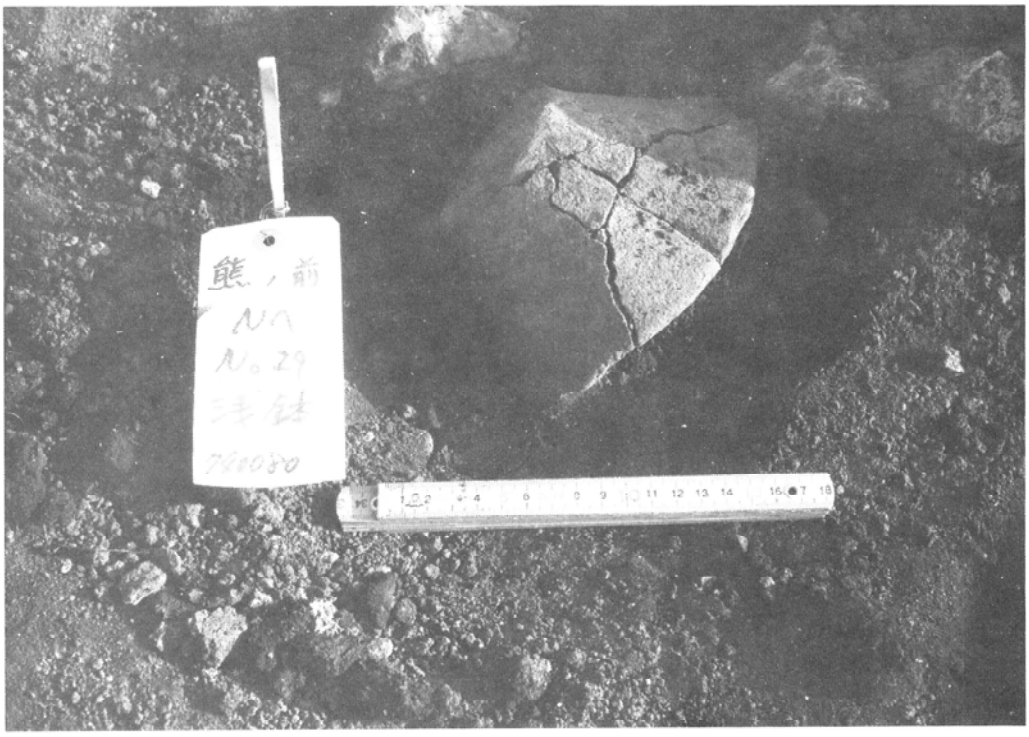
Ｎイ　土器底部の出土状況



Ｎウ　土器破片の出土状況

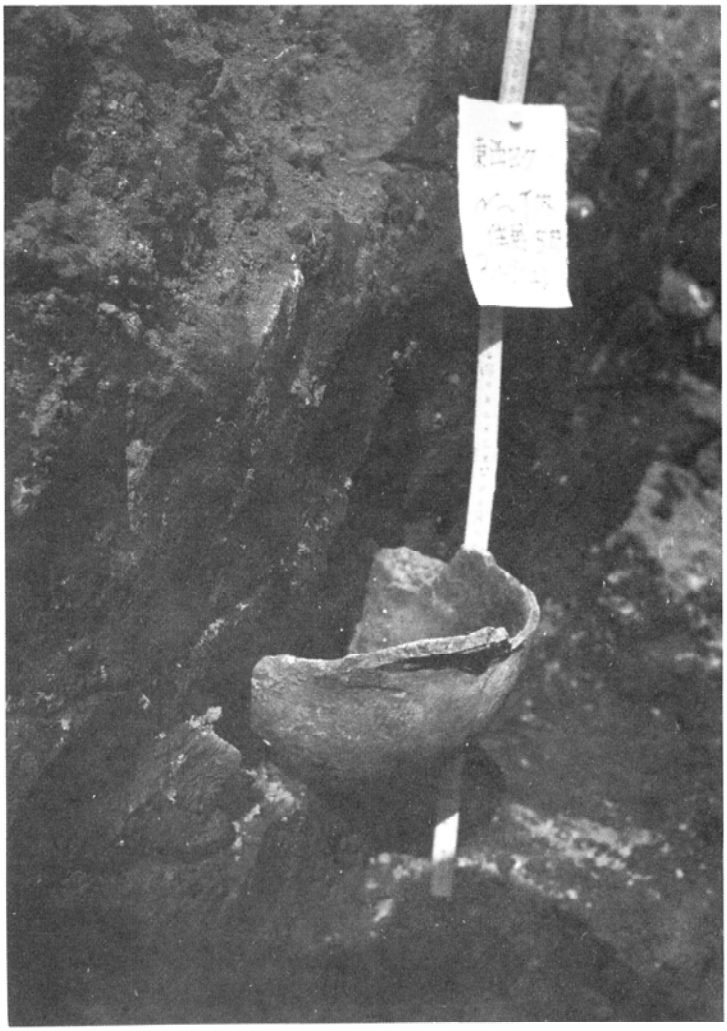


Ｎエ　高坏状土器の出土状況

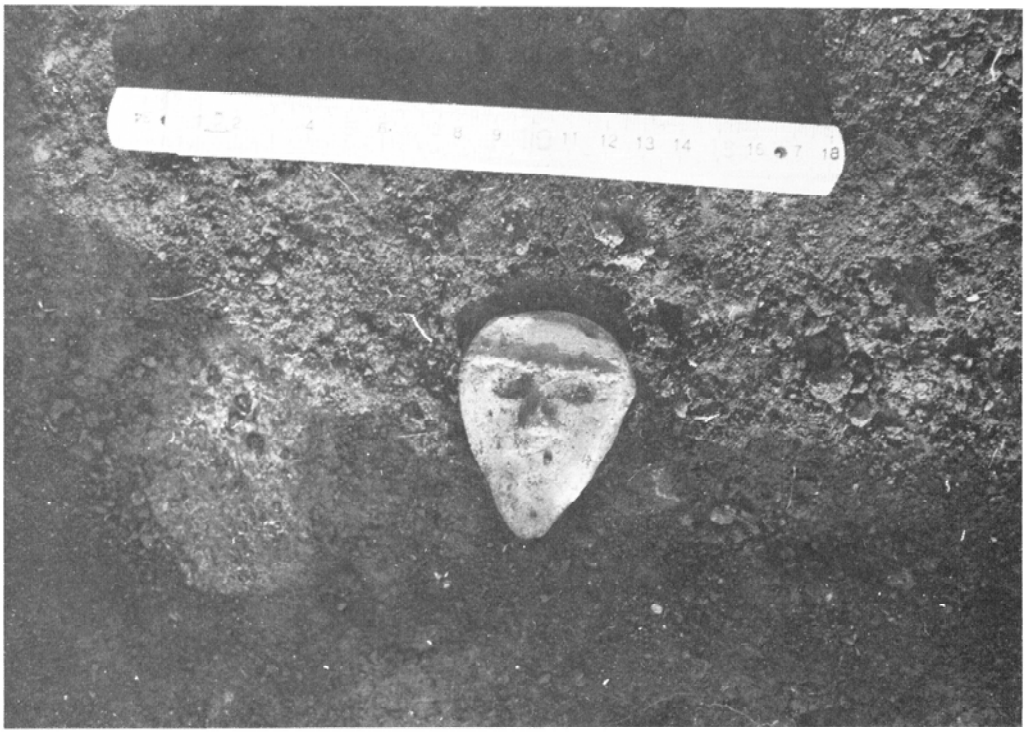


Ｎオ　浅鉢の出土状況

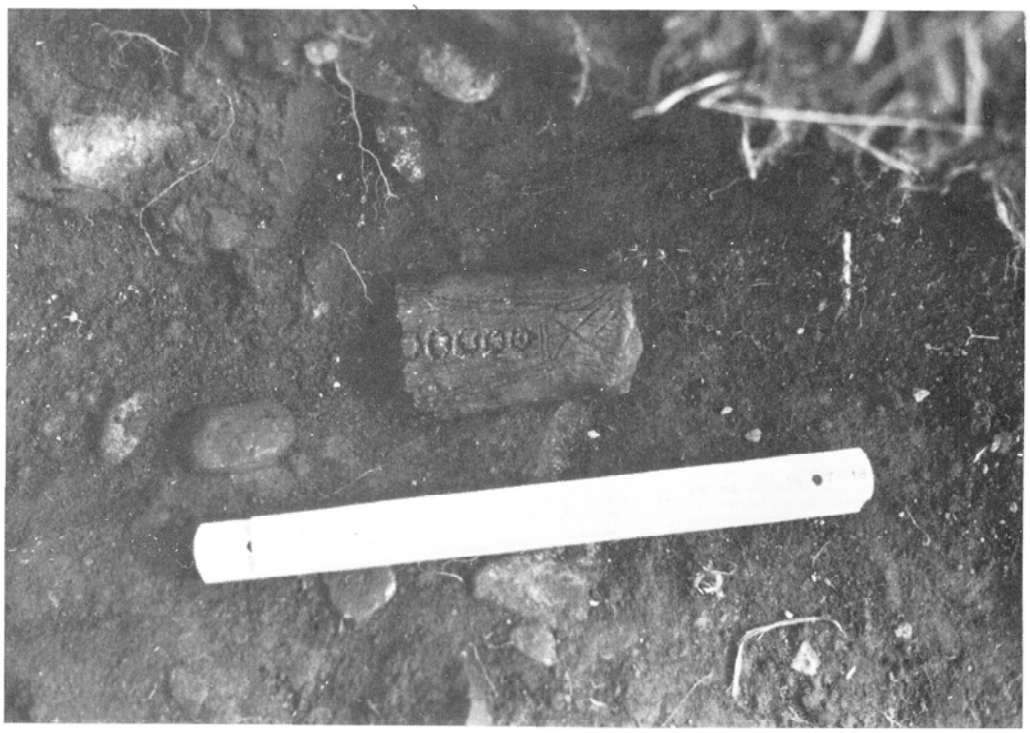
Ｎカ　第４号住居下からでた土器とその出土状況



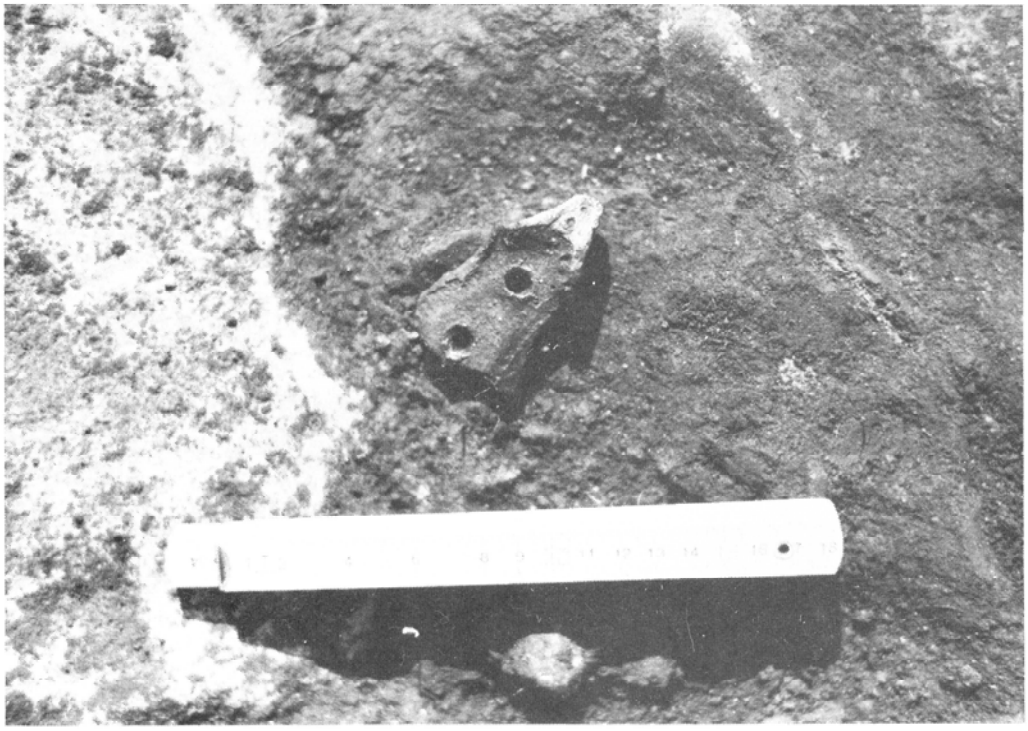
Ｎカ　第１１号住居跡
確認のきっかけとなった土器



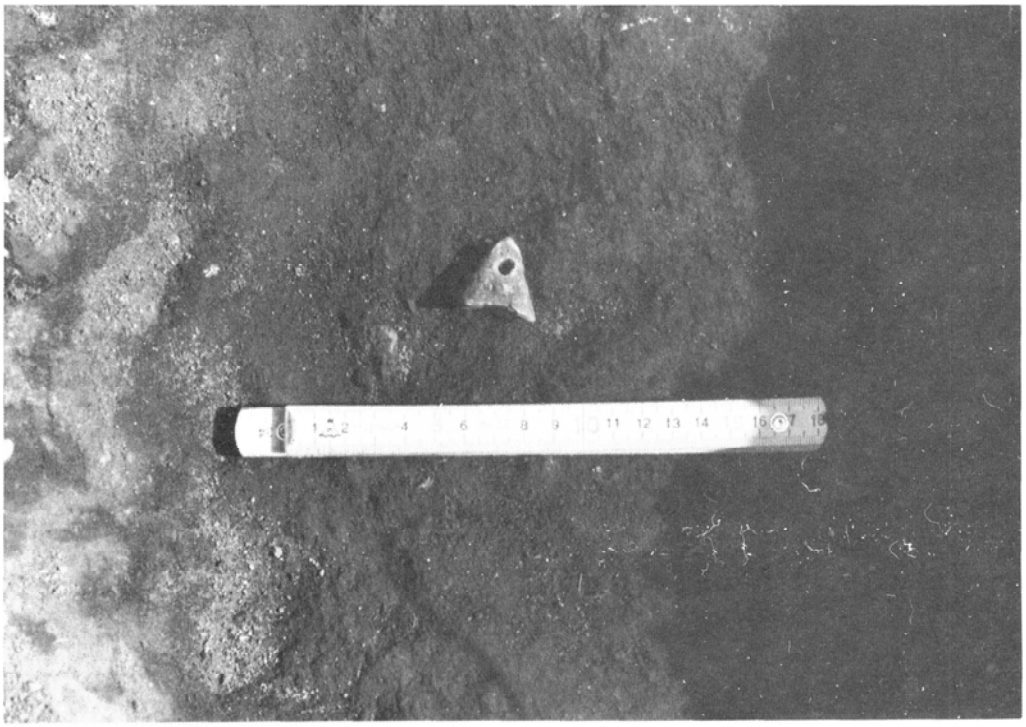
Ｎキ　土偶の出土状況



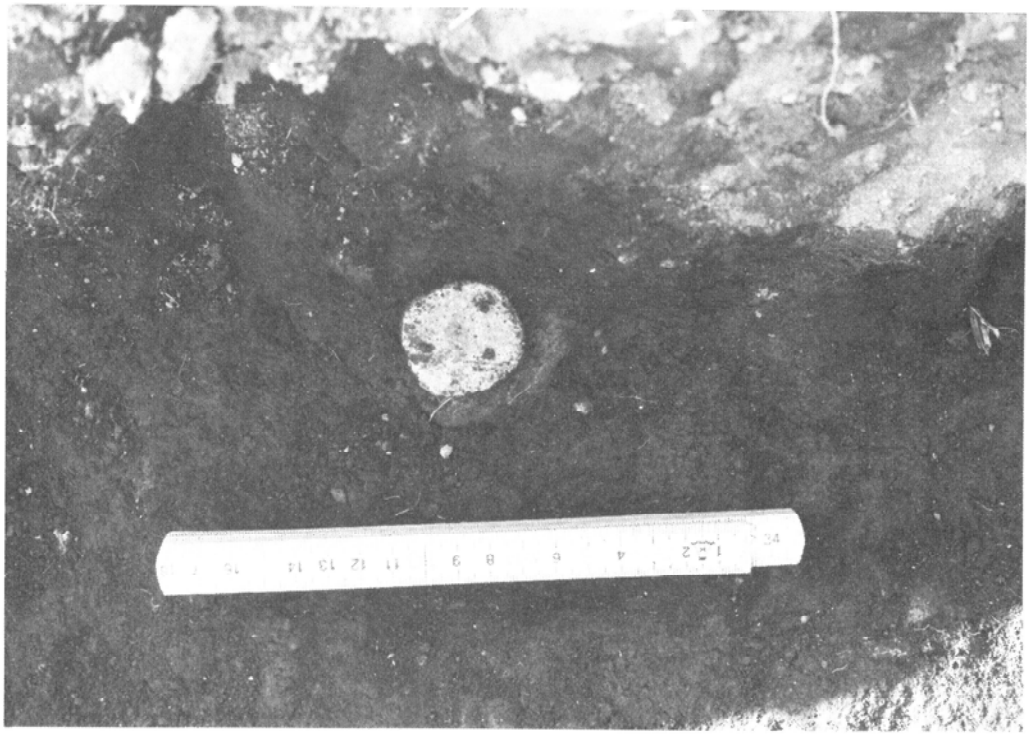
Ｎク　不明土製品の出土状況



Ｎケ　不明土製品の出土状況

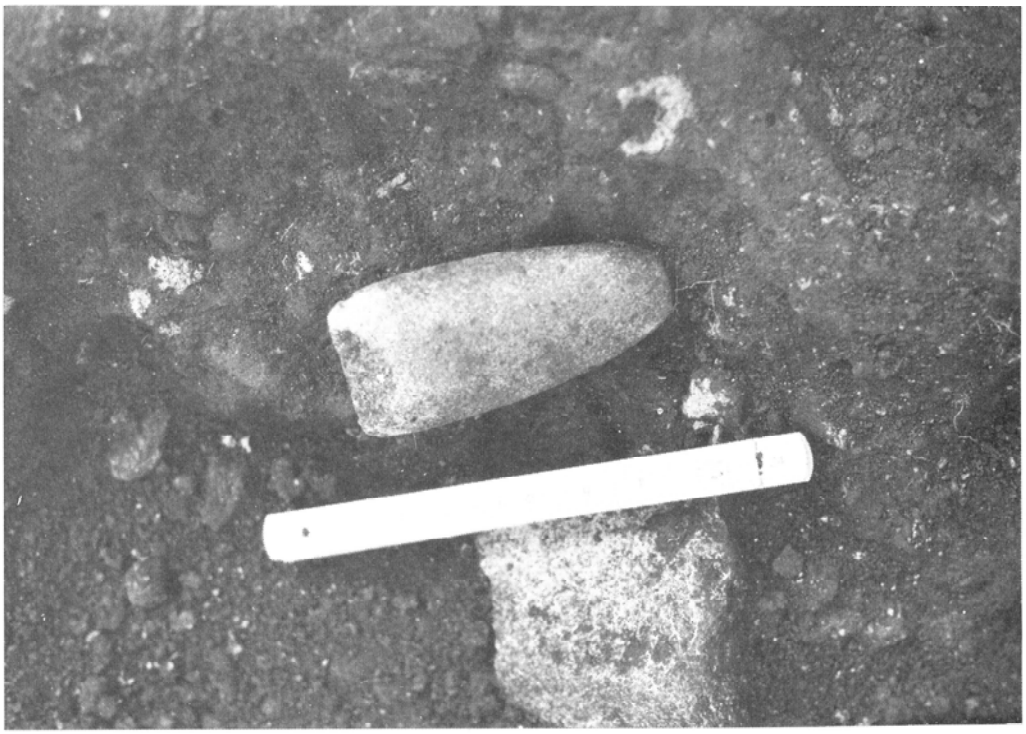


Ｎコ　不明土製品の出土状況



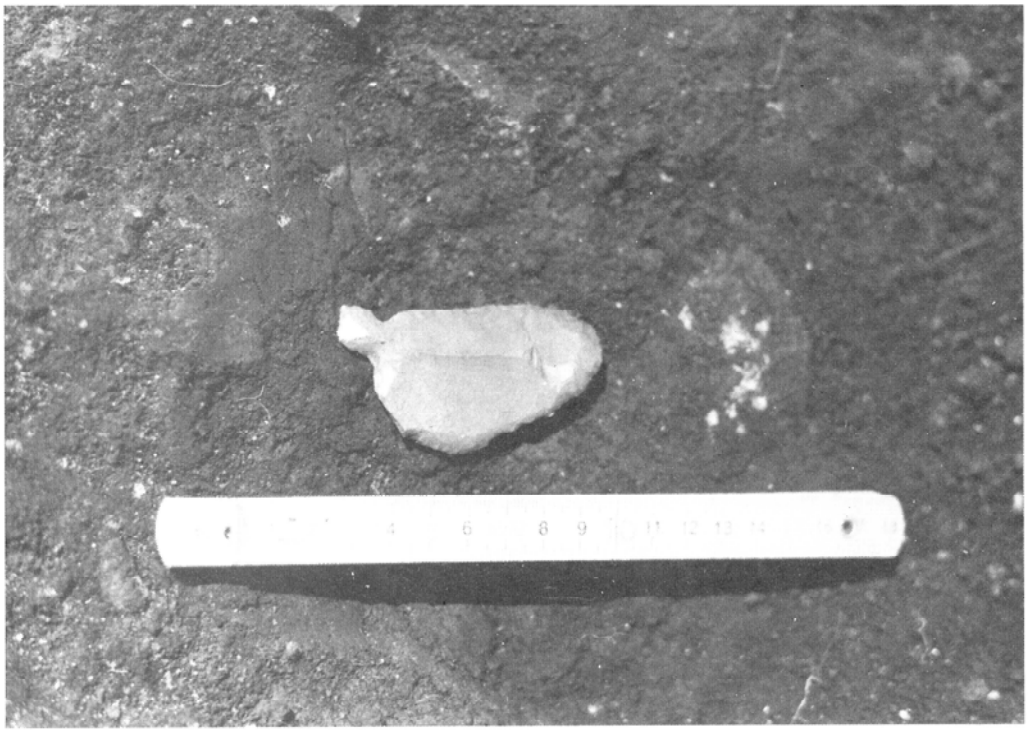
Ｎサ　土錘の出土状況

Ｎシ　磨製石斧の出土状況



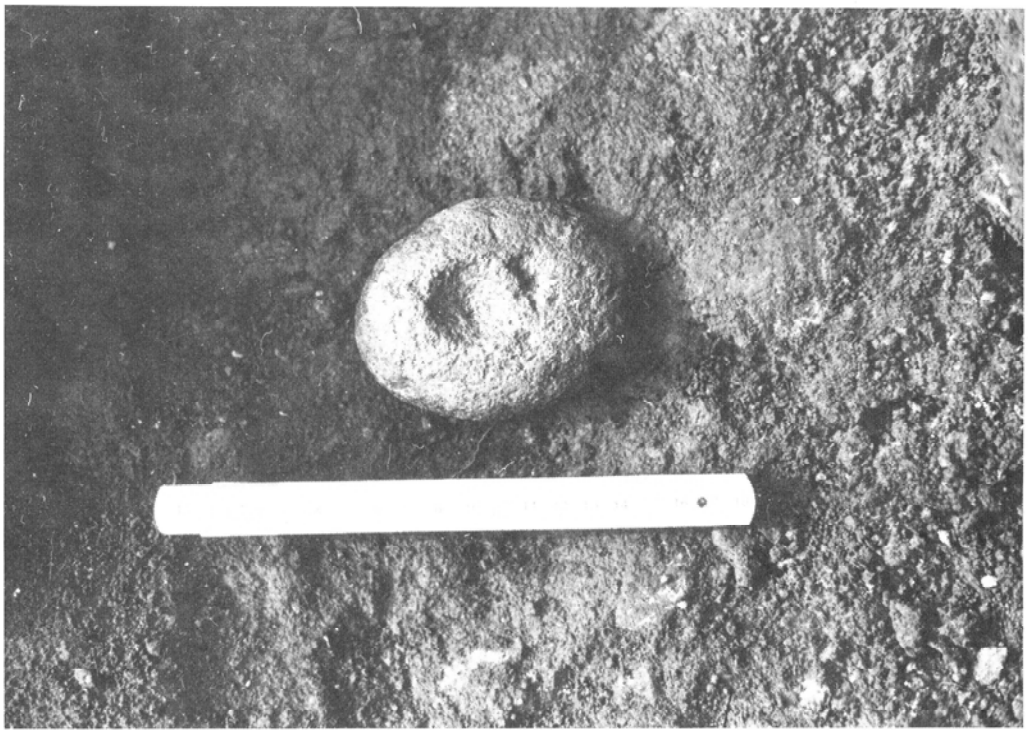
Ｎス　磨製石斧の出土状況

Ｎセ　石鏃の出土状況



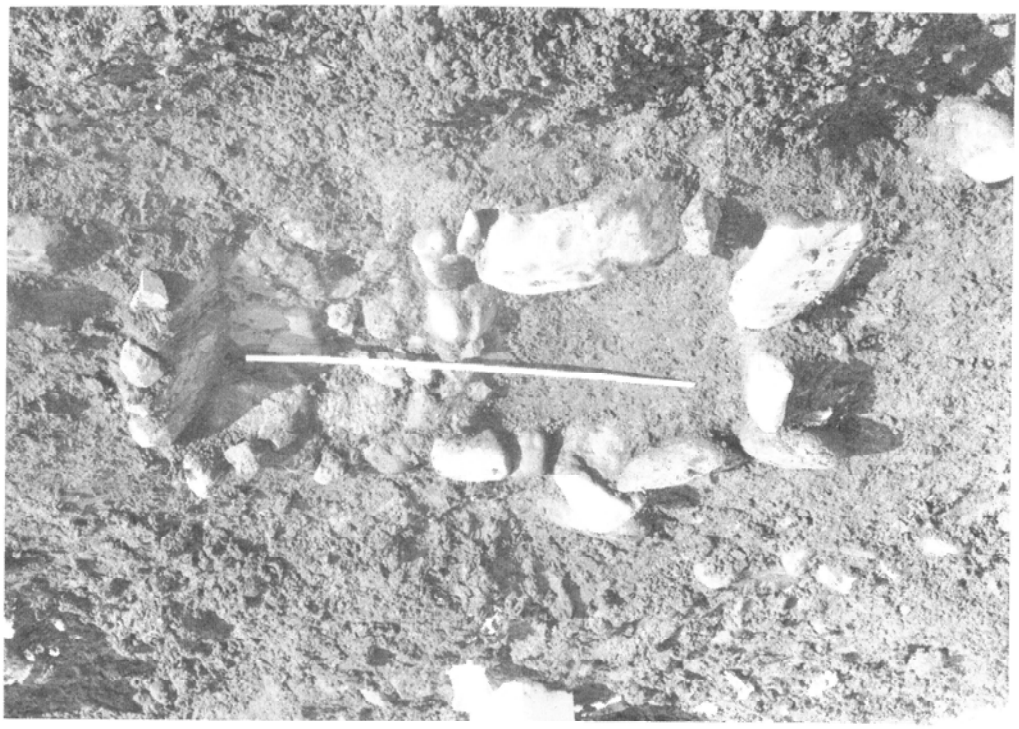
Ｎソ　石匙の出土状況

Ｎタ　スクレーパーの出土状況



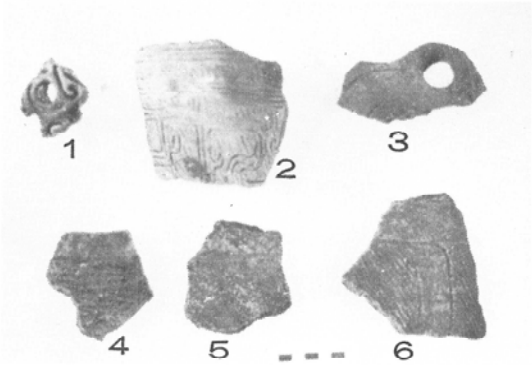
Ｎチ　丹ぬりの凹石の出土状況

Ｎツ　石錘の出土状況

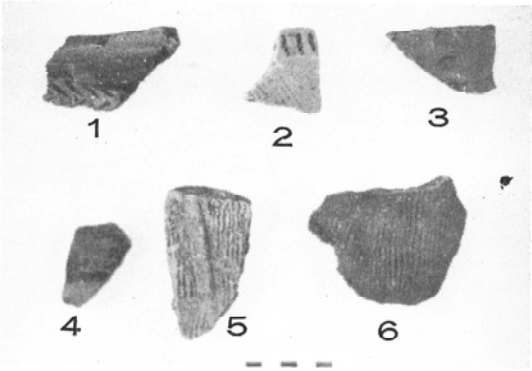


N地区第１号炉跡

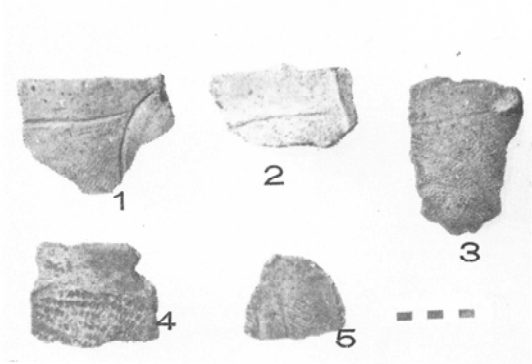
N地区第２号炉跡



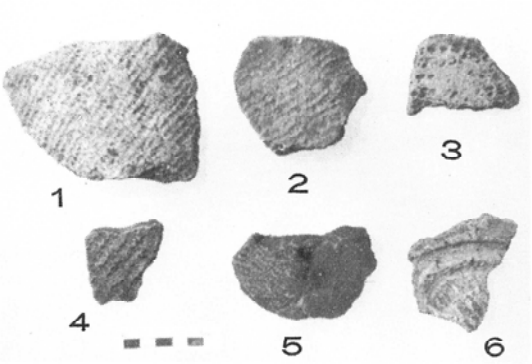
Ｃ１図



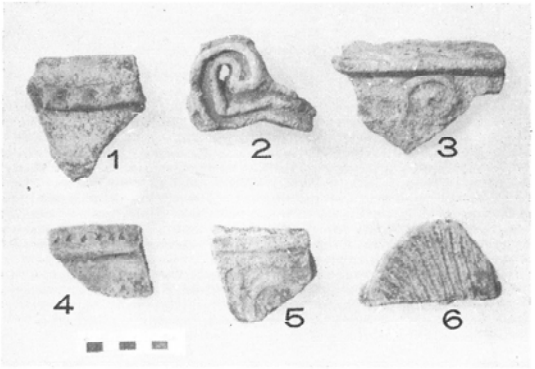
Ｃ２図



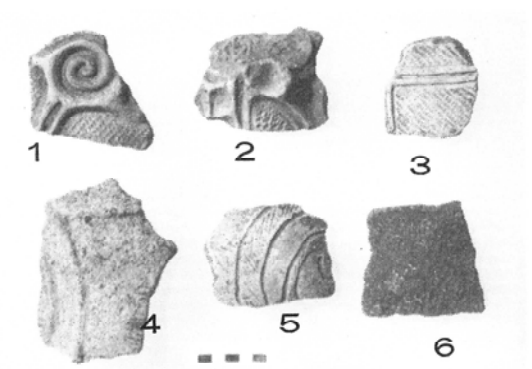
Ｃ３図



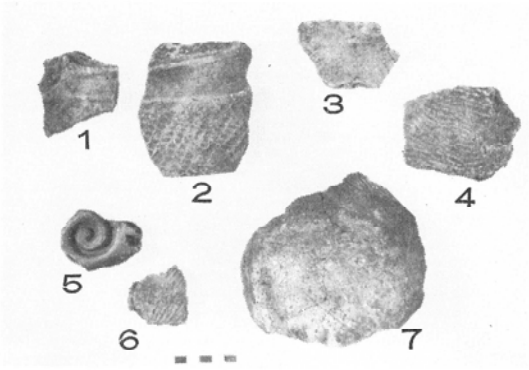
Ｃ４図



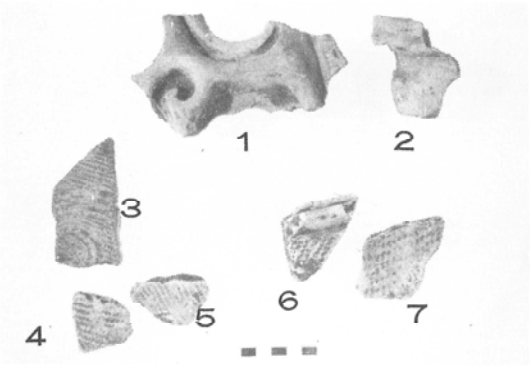
Ｃ５図



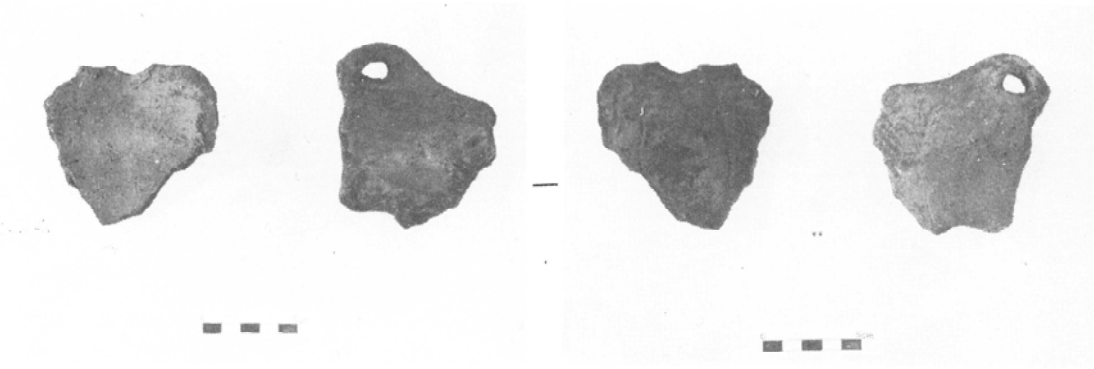
Ｃ６図



Ｃ７図



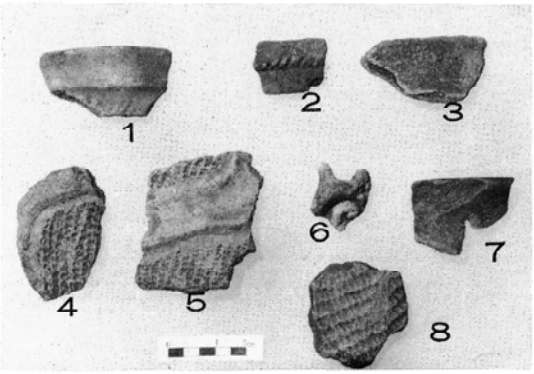
Ｃ８図



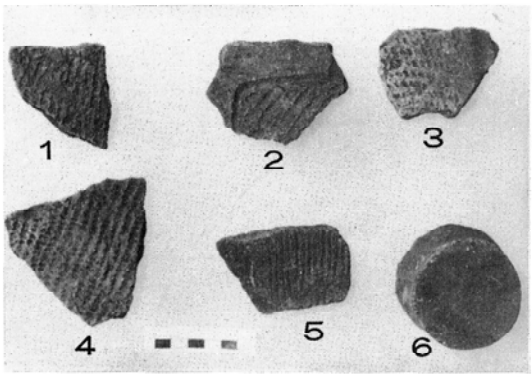
Ｃ10図

Ｃ９図

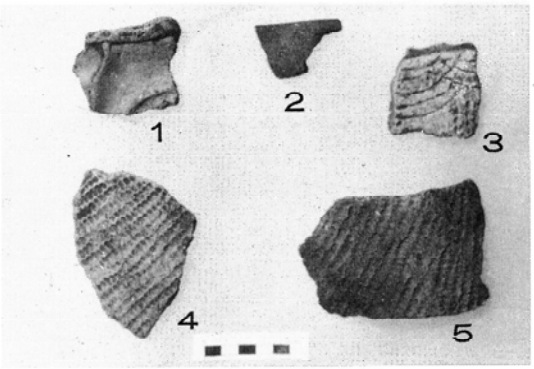
Ｃ11図



Ｄ１図



Ｄ２図



Ｄ３図

Ｄ４図

山形市熊ノ前遺跡
第1次調査報告書

昭和50年5月

発行　山形市教育委員会
山形市旅籠町2丁目3番25号

編集　熊ノ前遺跡発掘調査団

印刷　株式会社　大風印刷